
精霊の掟 ―ヴァイレサック年代記―

海松房千尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊の掟 ―ヴァイレサック年代記―

【Nコード】

N9192T

【作者名】

海松房千尋

【あらすじ】

精霊使いのラティーマは、ある日突然の呼び出しで大神官からの特命を受け、人族の国を目指して旅立った。

SF設定のハイ・ファンタジーです。

『楽園世界』は共有世界です。

楽園世界についてはこちら <http://www36.atwiki.jp/2theparadise/>

他サイトにて掲載中

【縦書き推奨】

旅立ち 02 ラテイーマ（前書き）

年代記がメイン。こちらはヴァイレサック年代記からの分割掲載になりますので、更新は年代記よりも遅くなります。

旅立ち 02 ラティーマ

滅多に人の通わぬ深い森の奥に、一つ一つが五〇〇〇トラン（約二トン）はあるであろう、巨大な石で造られた神殿が聳えている。

半ば土に埋もれてはいるが、地上に出ている部分だけでも八〇キツサス（およそ五〇メートル）はある巨大な四角錐の建造物。

ヴォル族の主神、デマ神の主神殿である。

普段は人気の無い、周辺に立ち並ぶ小さな神殿群——小さいとは言え、中心の神殿があまりにも巨大であるからこそそう見えているだけで、石やレンガで造られたそれらの神殿群も、人の世界にあれば十分過ぎるほど巨大な建造物である——の一つに、珍しく人族の姿が見える。

深い紺色のトーガに近い巫女の衣装に、鮮やかな水色のベールを被った女である。その姿は白い霧か霞のような物に包まれて、歩くたびにそれが渦を巻き、決して消えることが無い。

「レヴィエス様、遅くなりまして申し訳ございません」

ベールを上げてその顔を晒した女は、人とは思えないほど見事なヴォルティス（ヴォル語）を操っている。

若く見えるが、年齢を特定できるような特徴が殆どない。強いて言えば二十代の前半だろうか？

整った造りにシワー一つ、シミ一つない張りのある白い肌、夏の透き通った深い森の泉にも似た緑色の瞳と、濃い茶色の長い髪を結い上げ、白金の簪と櫛で留めている。

「ラティーマよ。遠いところをすまなんだ。じゃが、これだけはどつしても直接会って話さねばならない事だな？ 噂程度は耳にしておるか？」

対するのは明るい灰色のローブのような神官服に身を包んだ、ヴ

オル族の男である。

老齢に近いのであろう。長い鼻の両側から白い数本の髭が力なく垂れ下がっており、その耳も今は力なく垂れ下がっている。若い頃は見事な黒と黄色の縞模様であつたらしい毛並も、今は所々白く乱れている。

「……何処かで闇の魔法が使われたらしい、と」

一瞬言葉に詰りながらも、淡々と口にするラティーマ。

「そうじゃ。それが竜族によるものであれば、気にする事も無いのじゃが……」

「人が使ったのかもしれないと？」

鉾樹の枝で作られた、祝福の儀式で使われる瑞々しい緑の葉を残した短い杖を振り、唸るような声で呪文を唱えて明かりを灯すと、女について来るよう促し、神殿の奥へと歩き始める。

「あの日、お前の所でなんぞ異変は？」

女の顔を見れば答えは明らかであつたが、レヴィエスは歩きながら女の答えをまっっている。

「半年ほど前になりますが、明け方に突然精霊が騒ぎ出し、その後、精霊の眼で見ると東の空が明るく輝いてみえました」

足を止めたレヴィエスが俯き、苦しげに息を荒くしているのに驚き、慌てて身体を支えようとするが、その手を振り払われる。

「それは、どれほど、続いた？」

老いたヴォルとも思えないほど、その眼は鋭く、険しく光っている。

「少しづつ薄くなって、しかとはわかりませんが、六クエア（約六時間）から七クエアほどかと。それきり何事もなく、二度とは表れませんでした」

「もう、もう一つ聞く。その前後に、そちらでは、星が墮ちたり、凶星が出現したりは無かつた、そうじゃな？」

はい。と頷くラティーマ。

呼吸を整え、苦勞しながら姿勢を正すと、再び重い足取りで祭壇

の間へと続く扉の前で立ち止まる二人。

何度も来た事がある部屋だったが、それまでとは全く違い、扉の向こうに無数の人の気配がしている。

「……大陸中から精霊の眼を持つ者が集まっており」

ポツリと言われたその台詞に、思わず訝しげな顔になってしまう。大陸中からとは、前代未聞である。

「恐らく大陸の東の端じゃ。どこかは判らぬが、なんとしてもそれを突き止めねばならん」

「一体何事です？ 闇に魅入られし者が相手であれば——」

「……事はそう単純ではないのじゃ」

ため息と共に吐き出された言葉に、それまで一度も感じた事の無い怯えにも似た震えを感じて、沈黙するラティーマ。

「実はな、あの日以来、多くの神々が言葉を下さらなくなってしまっている」

恐怖に呼吸を止めたラティーマに頷き、杖を振って扉を開くレヴィエス。

さして広くも無い部屋の中には、二〇名近い男女が座っていた。

予想を遥かに上回る数の「使徒」と「送り手」達の数である。それも全員が「精霊」を身に纏った人族だ。

「場合によっては——」

緊迫した空気とざわめきの中へと足を進めながら、唸るようにして声を絞り出すレヴィエス。

「……聖戦も、覚悟せねばなるまい……」

旅立ち 02 ラティーマ（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。
よろしく願います。

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2theparadise/>

天空の道 01 ラティーマ

アルールシア帝国はエルシア公国の国境の街、ヴォル族にとってのアルナセル山脈、アルールシアの人々にとってのエルシア山脈にあるブイスタナの街の広場。人族の街らしく、隙間なく城壁に囲まれた、比較的大きな街の広場である。

中心部分を除いて、六〇を越える色とりどりの天幕を張った小さな露天が軒を連ね、西は遙かなミーデイスの鉾樹から、東はアルールシアを越え、海の彼方のアディエル諸島の煙草やベルリア諸島の香辛料まで、あらゆる物が並んでおり、今も小さな街の人口と同じくらいの人出があるだろう。

こんな山の中でと驚くラティーマに、ジョブスを売る露天の商人は、これでも昔に比べて火が消えたような有様だと言うのだ。それでは昔の賑わいとはどれほどのものだったのかと、想像するだけのため息がもれる。

この天空の街とも呼ばれるブイスタナは、そもそもエルシア公国の首都であるロヴィーサと、ヴォル領域を越えてワイプルス王国へと続く山脈公路もしくはエルシア山路（アルールシア側の呼び名）と呼ばれる街道の交易中継地として生まれた。

エルシア山脈のもっとも低い峠に作られているはずではあったが、それでもなお標高が高く、慣れない者は少し歩いただけで息切れしてしまうほどであったし、どれほど大きな火を使ってもお湯は熱くならず、知らない者には料理をするのにすら苦勞させられるような土地である。

エルシア王国がアルールシア帝国に呑み込まれる以前から、東西交易の中心的な公路の一つであったのだが、ジャルエルス諸侯国とワイプルス王国との間で行われた大規模な戦乱の影響により貿易

量は激減し、今ではエルシア山脈を越える商隊の数も数えるほどしかない。

ブイスタナの街も往時の繁栄を維持することは叶わず、今では三流以下の単なる地方都市の一つとなってしまうている。

とは言え、ここが国境の街である事実には変わりはない以上、エルシア公国の大規模な軍隊が駐屯しており、さらにアルールシア帝国の騎士団までもが常時駐留している。

結果、現在では残ったブイスタナ住民の大半が、軍の存在に依存する形で生活している。

つまり、ラティーマにとっては煩わしい事この上ない、無数の、女に飢えた男達が闊歩しているという意味でもあった。

アルールシア帝国の軍隊は軍規に厳しい事で有名であったが、属領である各公国の軍についてはその限りではないのだ。

街道を行く時であれば精霊の霧に包まれることで、隣を歩く者にすら気付かれる事なく進む事が出来るのであるが、下手に異教徒の神官やら魔導師にでも見つければ、騒ぎにならずには済まない。

以前にもダーラン王国でエディウス神殿の神官達によって、神の使いとして、延々と追いかけまわされた事があるのだ。

もっとも、カレス教国あたりで悪魔の使い扱いされて、延々と追いつけ回されるよりはマシではある。

「その女!」

突然声をかけられたラティーマに緊張がはしる。

考え事に夢中になって、つい気を抜きすぎてしまったらしい。

「はい?」

フードで顔を隠したまま、立ち止まって声の方を向く。

「落としたぞ」

言われてみれば、手に持っていたはずのジョブスの実が無い。普段なら精霊が拾って他の荷物と一緒に持ってくれるのだが、街中でそんな所を見られるのは不味いのだ。

「あら、これはありますがとうございます」

（リディ！　なんで教えてくれないの？）

（教えたよ。聞いてなかったのはティーの方）

「お前は……巡礼か？　何処へ行くのだ？」

（話しかけられてしまったわ。面倒になるかも）

（話しかけられちゃったね。食べちゃおう。見られないようにするよ。美味しそうだよ）

（ここではダメよ）

「はい、ソナスの大神殿まで参ります」

ソナスの大神殿といえば、女神アエリスの主神殿の一つであり、大陸中に聞こえた一大聖地である。特に神々の住まう神殿の一つとして広く信仰を集めているのだ。

女の巡礼が向かう先としては最適であるし、実際彼女の目的地の一つでもある。

落としてしまったジョブスの実を拾いながら、素直に答える。

見れば男は単なる兵士ではなさそうだ。立派な身体、とは言え立派でない体つきの兵士なんて殆ど存在しないのだが、それだけでなく、身に纏っている衣服がアルールシア帝国の貴族達の着る物なのである。

「そんな遠くまで！　立派な心がけだな。道中気をつけて行け」

と、ラティーマが危惧したような状況にはかすりもせず、爽やかな笑顔を浮かべて去ってゆく。

ところどころに金糸が混じったような、明るい茶色の髪に、藍色の美しい瞳が印象的な青年であった。

肩章からすると、恐らくアルールシア帝国の騎士団員で間違いないさそうではあったが、それが何という騎士団であるかは思い出せなかった。

（ティーはまたボンヤリ！）

「黙って」

思わず口にしてしまった台詞に、慌てて口を押さえてフードを直し、足早にその場を去るラティーマ。

だがリディの言う通り、外を歩くときはついボンヤリしてしまいがちなのは確かであった。

ヴォル領域に生まれて幼い頃から精霊達に守られて育った、ある意味どんな人族の姫様であっても、これ以上は無いくらいの、筋金入りの箱入り娘なのである。

使徒としての任を受け、人の世界を巡る日々の中にあっても、余程気を引き締めているつもりになっても、おっとりとして、どこかぼんやりしたところが抜けないだ。

「リディ？ あと何が必要かしら？」

（必要な物なんてないよ。何が欲しいっていうのさ？）

こうした場合、精霊の言葉ほど当てにならないものはない。

「えっと、水、干し肉と乾燥果実に、酢漬けとパン……」

指折り数えながら広場を巡るラティーマ。どうやら他に必要なものは無いらしい。

「じゃあ出発しましょう」

と、午後も既に遅い時間となっているのだが、精霊使いの彼女にとっては関係無い。

余程の嵐にでもあわなにかぎり、雨だろうが雪だろうが、全く気にする必要が無い。夜道であつても昼間と変わらず歩けるし、つかれたら適当な茂みにでも潜り込み、精霊に包まれて眠るだけである。時々他の弱い精霊や妖魔を取り込むために、半分くらいが離れてどこかに行ってしまう事はあるが、例え半分になったとしても、ラティーマの精霊の力は下手な妖魔など寄せ付ける事も無い。見つければ逆に喜んで取り込んでしまうほどなのである。

そんなわけで、あと数時間もすれば日が暮れるという街道に向かい、自身の身体と同じくらいに大きな背負い籠を背に、どこかのんびりとした歩みで街を出て行くラティーマである。

城門を守る兵士に適当に頭を下げて城壁を抜けると、ラティーマはすぐにリディをまもって姿を隠す。

「ねえリディ、またお話して？」

（お話？ 見える方がいい？ 聞くだけ？）

「お話だけでいい」

それはラティーマにとっての唯一の、そして最大の楽しみの一つである。

ラティーマの精霊であるリディは、生まれた時から数十万の、様々な形の物語を覚えていたのである。

（どんなお話にしようか？）

どこか楽しい気な雰囲気をもとっているように、リディ自身も物語を聞かせたり見せたりするのが大好きなのである。

「それじゃ前の続き」

（たくさんあるよ。前って何時のお話？）

「魔法が無い世界から、魔法のある世界に呼び出された使い魔の話がいい」

（わかった——それは、昔のお話です……）

……こうして、ヴォル族の大神殿を出発してから早ひと月、ラティーマとリディは、アルールシア帝国領内へと足を踏み入れたのであった。

天空の道 01 ラティーマ（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。
よろしく願います。

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>

天空の道 02 ラテイマ

ラテイマにとって、人の造った人の住む街というのは、尽きぬ興味の源ではあるにせよ、自ら近付きたいと思う場所ではなかった。ラテイマ自身はともかく、精霊が嫌がるのである。

ラテイマを守る精霊。

それは魔物や野獣のひしめく荒野に、裸であっても何の恐れもなく眠りにつけるほどの力をもっており、その力は他の妖魔や魔物を「食べる」事で増し、ふるうことで減退する。

ちなみに魔物や妖魔は、生物がその身に精霊を宿す事によって生まれる場合と、全ての生物に普遍的に宿ったマナが、その生身の部分を侵食することによって生まれる場合の二種類があると考えられている存在である。

当然、魔物は一見他の動植物と見分けのつかないモノも多いが、その大半は身体の一部がマナの塊と化している。

純粋なマナの集合体である精霊からしてみれば、その程度の半端な魔物などせいぜいがおやつかご馳走程度のものなのである。

精霊とは意識と意思をもったマナそのものであり、妖魔や魔物というのは、いわば精霊になりそこねた生物であると言えるからだ。

おそらく余程高位の妖魔でもないかぎり、ラテイマの精霊の守りを打ち破れるモノなど存在しないだろう。

が、そんな精霊にも苦手な場所というのが存在している。

それがつまり、城壁に囲まれた、人の造った人族の街なのだ。

魔導師になるほどの才能は無いにせよ、心の動きにあわせ、感情の波を無秩序に撒き散らす人々が無数に存在している城壁の内側では、精霊意たちは、避けようのない音の暴風が吹き荒れているかのように感じられるらしい。

騒がしい場所で人が集中力を欠いて全力を発揮できないように、精霊の力も弱まってしまふのだ。それによっていざという時、ラテ

イーマの身を守りきれないかもしれないというのが我慢できないらしい。

もちろんラティーマに心の音だの感情の波だのというものはわからない。

人の——人だけではないが——撒き散らしているという感情の波など感じた事はない。

精霊たちのもらすため息のような「なにか」を感じる事はあるにせよ、ラティーマ自身は余程の、精霊なみに濃いものでないかぎり、マナを見ることが感じることもできないのである。当然魔法の才能など皆無だ。

魔法も使えず、幼い頃から精霊に守られ、精霊と共に生きてきたラティーマに武器を扱う心得などあるはずもなく、精霊がいなくては何一つできない彼女が街に、それもなにやら騒然として、誰もかれもが殺気立っているような街に入るなど、彼女を守る精霊が反対しないわけが無いのである。

そんなわけで、険しく切り立った崖を刻むようにして造られた細い街道を歩き続けてようやく見えてきた、谷間の狭い平地にあるラシデリアという小さな街を目前にして、五ティーボ（一五分ほど）にわたって余人には決して見ることの出来ない攻防戦が繰り広げられているのだ。

（ダメだよ！ ティーは中に入ったらいけないよ！）

頭が痛くなるほど騒いでいる精霊に、ラティーマは何度目かになるわざとらしいため息をつき、諭すように囁く。

「大丈夫、神殿で捧げ物してお告げをもらったらすぐに出るんだから。それにここに寄らなくてはなんのためにこの道を通ってきたのかわからないでしょう？」

（絶対ダメ！）

ビスタナの街を出て、すれ違う者もないまま歩き続けたラティーマにしてみれば、たとえそれが露天の店主とのちょっとしたやり取りに過ぎないにせよ、精霊以外の人（ヴォル族やプリマ族も含む）

との会話は欠かす事のできない旅の楽しみの一つなのだ。ここで引き下がるつもりはまったく無かった。

いい加減説得という手段は諦め、黙って歩き始めるといふ強行手段にでるラティーマ。

流石の精霊もこれには折れるしかない。

精霊は、規模から言えばブイスタナの三割程度の小さな街の、その貧弱な城壁向かって歩き始めたラティーマの周りで、不機嫌そうに渦を巻く事しかできないのであった。

「巡礼だと？ お前一人でか？」

と、最初不審人物を見るような、ついでなにやら好色そうな、値踏みするような目でラティーマを見つめるのは、城門の責任者らしいラングという壮年の衛士である。

巡礼らしい質素ではあるが、防寒に優れた練色の分厚いレナ（羊毛・羊）のアクパト（フード付きのローブのような外套）と、その下に見える、これまた分厚い朽葉色した、足首まであるグリンチャの上衣と、萌葱色を基調に蠟染めらしい水色と藍色の模様の入った厚手の腰紐を締めている。

どれも確かに一般でも手に入る品物であるのは間違いないが、それなりに値の張る上等な品である事が見てとれる。

多くの旅人がするように、この巡礼も城門に入る前に着替えたのであろうが、一張羅にしてもこの辺りでは、特にここ数年は、滅多に見ないほどの品物である。

もしかしたらそれなりに名の通った商家の娘なのかもしれないが、そうであれば一人旅というのはおかしい話である。

よく見れば、荷物のスプレディッタ（背負子のような背負い式の籠）も造りの良い、そこらの農家の娘が使うような品物ではない。

そう考えるとますます目の前に立つ女の素性が分からなくなる。が、女が持ってきた手形はワイプルス王国の、それもどこぞの

貴族が出した簡易のものではなく、王国の正式なものである。

この数年一度も目にしていなかったものであったが、仮にも責任者をしている立場の人間が、これだけは見間違えるはずもない。

これは貴族でなければ余程の豪商でもなければ触れる事すら出来ないはずのものであり、そこに押された手形は確かに本人のもので間違いなかった。

なにより日々野良仕事や下働きをしている女の身体つきではないし、その手も水仕事など考えたこともないような色艶の手指をしている。

「本当に一人なのか？」

と、どうしても分からずもう一度聞いてみるが、なんとも不思議そうな瞳で即座に「はい」と返事をしてくる。

よほど何か剣術なり武術なりの心得でもあるのかとも思うが、その手と、柿色に美しく染められた爪をみればそんな事もなさそうである。

かと言って、邪な目的をもってこの街に潜入するような者にもみえず、春売りの女がその罪を雪ぐ目的での巡礼にも見えない。

そもそもなんぞ邪な目的で街に入ろうとする者が、バカ正直に門をくぐって来るはずもない。

わけがわからなくなってその顔を呆けたように見ていると、同じように、わけがわからない様子の呆けた顔で見つめ返してくる女。

流石にバカバカしくなってしまう、手形に添えられた樹絹の折布に、通行を許可した旨を表す印を押す。

「問題を起こさぬよう。罪を犯せば他国の者として平等に裁く事になっている。この街は畏れ多くも天領である。どのような小さな罪も決して見逃さぬゆえ、心せよ！」

と、全ての旅人に伝える言葉を口にして、街の中へと顎をしゃくると、思いもよらなかった台詞が返って来た。

「心して置きます。不慣れな一人旅とは言え、決してお手を煩わせるような真似はいたしません」

ラングは思わず面食らったような表情を浮かべてしまいが、立ち去る後ろ姿を見ながら、なんとも言えない不安に襲われてしまう。

つまり、あの女がどこぞの貴族の令嬢や豪族、もしくは豪商の息女であった場合、この街で女の身になにかあれば、下手をするとその責任をとらされるのは自分ではないかということである。

なにより、この街では三年ぶりに起きた大事件、それもエディウス神殿という、この国の最高神の神官に対する傷害事件を端にした、街の全ての神殿を巻き込んだ大騒動の、まさにその真っ只中にあっただのだ。

そんなこんなに思い至って、慌てて部下の衛士に保護させようとその場を立つが、何処に消えたか、女の姿は既に何処にもなかったのであった。

「ねえリディ？ 私はそんなに怪しい人間に見えるのかな？」

毎度毎度の事ながら、どうして自分ばかりがこれほど不審な目でみられるのか全くわからないラティーマ。

使徒であれば、どんな場にあっても最適な返答を即座に返せるだけの訓練を積んでいるし、先程の受け答えも全く問題はなかったはずなのである。

侮られる事なく、かといって下手に警戒される事もなく、使徒という存在が知られているはずも無いのであるが、決して秘密の任についている人間であることを悟られる事がないように。

それなのに、ラティーマがどんな態度をとろうと、どの街へ行こうとも、必ず先のような不審な人物を見るような目で見つめられるのである。

ラティーマのみせる全ての仕草や返答や身だしなみが、いわゆる「やりすぎ」もしくは「凝りすぎ」であることが原因なのだが、人族との付き合いが薄すぎるラティーマと精霊にはどうしてもわからず、人の街を訪れる毎にその不審度はあがってゆく。

（そんな事はないよ、ティーは完璧だよ）

その完璧さが問題なのである。

「そう、よね。ありがとうリディ」

（どういたしましてティー。でも早くここから出よう）

「そうね、嫌な目にあわないうちに早くここから出よう。デマ神様の御印を捧げたら、直ぐに出る。私もなんだか気分が悪くなっちゃしね——」

……そう心に決めたラティーマではあったが、それが叶うまでには、もうしばらくの時間を必要とするのであった。

天空の道 02 ラティーマ（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。
よろしく願います。

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>

天空の道 03 ラティーマ

その日、宿泊先の安宿から、ラティーマとリデイがラシデリア（古のヴォル語で女神の街との意味がある。人族には伝わっていない）のエディウス神殿に出向いたのは、ピレリスの終わりを告げる鐘（正午＝エリ・スクール）の頃であった。

西方の人族の国々と違って、昼食をとるという習慣の無いアル＝ルシアの人々にとっては、特に迷惑がられるような時間でもないはずであったが、その門は固く閉ざされ、門番らしい低位の神官服を来た男と、武装した数人の衛士達が鋭く辺りを警戒していた。

（リデイ、どうしよう？ なにかあったみたい）

（やっぱり早くここから出ようよ。ここには誰もいないよ？）

（何を言ってるの？ ダメよやらなきゃいけない事があるって言うたでしょう？ あ、どうしよう。こっちを見てるわ？）

（邪魔なら食べちゃおうか？）

（リデイ！ ダメだってば！）

傍目には一人の女の巡礼が、のんびりと歩いているだけにしか見えないが、この殺伐とした雰囲気の中では、それはやはり異様に見える。

なにより、警護の衛士や閉ざされた門を見れば、一般の信者や巡礼など、とても入れてもらえそうに無いことだけは、明らかなのである。

「女！ 何者だ！ 神殿になんの用があつてまいった！」
当然の誰何である。

（大変、声をかけられちゃったわ）

（ティーを困らせてるなら食べちゃおう！）

（だからダメ！）

「はい、巡礼の安全を祈願に、捧げ物を持ってまいりました」

「捧げ物だと？ 今全ての神殿が「忌み（穢れを払うために神官以外の立ち入りを禁じる事）」に入っているのを知らんのか？」

（リディは知ってるよ？ 昨日宿の人が言ってた）

（どうして教えてくれないの！）

（どうして？ ティーも一緒に聞いてたでしょ？ わすれちゃったの？）

（そういえば……）

言われてみれば、宿の女将が気の毒そうに、そんな事を言っていた気がする。

「あの、はい、聞いておりましたが、せめて外から眺めるだけでも思いまして……」

と、その返答を聞いた衛士の一人が、ラティーマに声をかけてきた衛士に一言二言ささやくと、なにやら妖しい笑みがその口元に浮かぶ。

「女、捧げ物とは一体何を持ってきたのだ。なんぞエディウス様に仇なす物ではあるまいな？ あやしい奴だ！ やはりここはじっくりと話を聞かねばなるまい、屯所へ引つ立てろ！」

（ティーにひどいことをするつもりだよ！ 敵だよ！ 食べちゃおう！）

（ダメよ！ あ、でもいえ、まずいわ、そんな事をしたら、折角の手形が無駄になっちゃうもの、でも、どうしましょう？）

などと、男の台詞など殆ど聞きもせずにしたラティーマだったが、それ、とばかりにラティーマを取り囲む衛士達を見て、流石に身の危険を覚えてしまう。

と、広場の端からそれを見ていたらしい騎馬に乗った旅姿の騎士の一団から、一人の男が、大声をあげて馬を走らせてきた。

「何をしている！ たった一人の巡礼相手に、五人もの男が取り囲まねばならぬとは、一体何事か！」

（また誰か来たわ。どうしましょう。全部食べてもらった方が早いかしら？ でも、そんな事をしたら、また何処かで手形を手に入れ

なきやいけなくなってしまうわ？)

やはり何処かズレているが、その方向が実に物騒であるのがラティーマらしいと言える。

「わ、私たちは、このあやしい女を……」

「黙れ！　こんなに怯えておるではないか！　やましい所が無いのであれば、この女の一体どこがあやしいと判断したのか、しかこの場で述べてみよ！」

と、馬上からの大喝に、衛士達は見る影もない。ちなみにラティーマは怯えていたのではなく、この場の全員を殺した場合の損得を計算し、顔をしかめていただけだ。美形というのは実にお得である。「出来ぬのか？　そうであろうな、そういう下衆な顔をしている。おぬしらのような下衆に守られなくてはならぬでは、神官長もエディウス様に顔向けが出来ぬであろう！　性根を入れ替えてくるまで外門の警備でもしておれ！」

と、この騎士が一体どれほどの権限をもっているのかと、思わずその騎士を見上げたラティーマであったが、周りの衛士達も同様であったのだろう。お互いの顔を見回し、グズグズしている。

「なんだ？　ふっ、そうか、まだお前たちは何も聞いていないのだな？　ならば教えてやろう。私の名前はミーシャ・レンディー、レンディー侯爵家が嫡男にして、男爵位を賜る近衛騎士である！　代官より全権を委任されて此度の事件の鎮定に参った！　我が身上に疑問があれば、即座に代官所へと名乗り出よ！　この場は私の騎士達が預かる！　早々とこの場より立ち去れいっ！」

多少、というか、多々自己陶醉気味の台詞が散見されるが、帝国の近衛騎士団の一員ともなれば、名実ともに最高位の騎士達である。その実力とプライドの高さも半端なものではない。この程度の物言いなど当然である。

その場にいわせれた全ての者が畏れを抱いて（アーシアであれば間違いないくだけだろうが）後退した所で、一人なにやら不思議そうな顔で騎士を見つめて立ち尽くしているラティーマ。

当然ながらぽつんと一人、目の前でミーシャを見上げる格好とな
っている。

「なにかな？ おお、これは、あの時の巡礼ではないか！」

（え？ あの時？）

（ティーマも知ってるよ、ブイスタナでジョブスの実を落としたって
教えてくれた美味しそうな人！）

「ああ！ あの時の騎士様！ って、近衛騎士団！？」

慌ててその場に膝を付き、ラティーマの学んだ礼典に則って、古
式ゆかしい礼をとる。

だが、その礼典は、アルールシア帝国と呼ばれる以前、ルシア平
原に覇を唱えた遊牧民達のものである事には気付いていない。

現代でもルシア平原の遊牧民であれば同様の礼をとることも少な
くはないが、現在の、ソナス式の礼典が一般化しているアルールシ
ア帝国の騎士にとっては、いかにも奇異な態度であった。

ラティーマとて、ソナス式の礼典についての知識は当然もってい
たのだが、目の前に立つ騎馬と騎士という存在に目を晦まされてし
まったのである。

「近衛騎士様とは知らず、ご無礼をいたしました。どうかお許しく
ださい」

「……よい、気にする事はない。巡礼の方、よろしければお名前を
賜りたく存ずる」

その一瞬の沈黙がどのような意味をもっていたのか、それはこの
ミーシャという騎士にしかわからない事ではあったが、険しい峠を
越えて、遙かワイプルスからの巡礼であると思われる女が、何故
ルシア平原の騎馬民族の如き礼をとるのか、この程度の疑問を抱く
事もないような者が、近衛騎士団の一員となれるはずもない。

単なる平民の巡礼に対して名を尋ねているのとは異なる物言いが、
その心情を表している。

流石のラティーマも自らの失敗に気付いて動揺しているが、素早
く辺りを見回し、強行手段に出るのは控えるべきだと判断したらし

い。

即座に態度を改める。

「どうかお尋ね下さいませぬよう、平にご容赦を、決して帝国と王国に対して仇なす者ではござりませぬ。ただ、騎士様にだけは、私の真の目的を、いえ、ソナスの神殿に向かう巡礼であるというのに嘘偽りはございませぬ。もう一つ、亡くなった母の形見を、ソナスにある祖父母の墓へと供え、母の代わりに、勝手をして不孝をしたという祖父母に対し、謝罪の祈りを捧げに参るのでございます」

と、涙まで浮かべて、いかにもこうした騎士達の好みそうな話を捏造するラティーマ。

その口調もどこか古めかしい言葉遣いではあるにせよ、とても平民の娘にはありえない、凜とした美しさをもつ、貴族風のソナス語であった。

「なんと……それは、知らぬ事とは言え、すまぬ。いや、私もそんなが悪しき者であると疑っていたわけではないのだ、そうか、母の思いを叶えるために、はるばるとなあ。いや、もちろん、そのような理由であれば、名を知られるのもまずかろうな、きっと名のあるあぁ、もちろん聞きはせぬが、ソナスには母御の兄弟なり甥なりが暮らしているのだろう？ いや、聞かぬとも。うん、苦労であろうなあ。……そうか……」

とひとしきり、勝手になにやら呟くように言いつつ納得し、いたく同情された上に感心されるラティーマ。

（めんどうだわ。納得したら早く立たせてくれないかしら？）

（めんどうだね。食べちゃおう）

（だからダメ！）

と、口に出さずにリディを叱った瞬間、さとられないよう頭を下げたところ、どうやら泣き出したのだとも思われたのか、一息に鞍から降りると、真新しい、砂埃を防ぐ目的で使われるスカーフの予備を取り出し、背を向けるようにして、片手で立ち上がらせながら、涙を拭くようにとでもいうのだろう、ラティーマの手に握らせ

てくる。

（あら、香り袋を使っているのね、なかなかの洒落者みたい。でも、涙なんて急にはでないし。リディ、見つからないように、水を少し出せる？）

（大丈夫。上手く袖口から出すよ）

「その、なんだ、なんと呼べばいいのか、本当の名前でなくてもよいから、教えてくれまいか？」

泣いたふりを適当に切り上げ、濡れたスカーフを返そうとしたラティーマであつたが、ミーシャはそれを受け取らず、そんな事を聞いてくる。

（どうしましょう？ 手形の名前でいいかしら？）

（名前なんてなんでもいいよ、ティーはティーじゃない）

「はい、ラティーマとお呼びください」

「ラティーマか、西国風でありながら、ソナス風の響きをもっている、良い名だな。それより、ラティーマよ、何故ここに？ ソナスに向かうのであればここは遠回りであろう？」

「あ、はい、その昔、西国に向けて旅だつ前、母が旅の安全を祈願したというエディウス様の神殿に、お礼を兼ねての捧げ物を致したく……」

「おお、そうであつたか、だが、残念ながら見ての通り——いや、ラティーマ殿、ここは一つ私に任せて、しばらく待つて頂けまいか？ 私がなんとかしよう」

（ああ、めんどろだわ。夜になってから忍び込めばいいだけなのに、変に目立ってしまったらどうしよう）

「そんな心配そんな顔をしないで、大丈夫だからすべてこの私に任せて、今日は宿へ、おう、そうだ、何処に泊まっているのだ？ 私がそこまで送ろう、また先のような面倒事に巻き込まれるのは恐ろしかろう。なに、大した手間ではない。心配する事はないのだ——」

……なりゆきに任せる他無いラティーマであつた。

天空の道 03 ラティーマ（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。
よろしく願います。

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>

天空の道 04 ラティーマ

ラティーマが耳にした事件のあらましについて、リディはなんら有用な意見やら知識やらの持ち合わせが無かった。

（だって「精霊」だものね。「神々」のことなんてわかるわけないか……）

それは確かにその通りであった。

「こまつたわ」

これじゃ任務が果たせない。

そう思ったところで突然声をかけられ、飛び上がるラティーマ。

「どうされました？」

ここ数日、本当に真面目に仕事をしている暇があるのだろうか、他人事ながら何度か考え込んでしまっている人物、帝国近衛騎士のミーシャであった。

ラシデリアではそれなりに上等とされる部類の、古ぼけた小さな宿屋の一階、酒場兼食堂となっているそこは、当たり前だが誰でも入って酒や食事を楽しむ事ができる。

今のところラティーマ以外に客は無く、この立派な風体の騎士さまがいたとしても、なんら問題があるわけではないのだが、そもそも他人と親しく話す機会の少なかったラティーマにとって、自身の正体を知らない相手との会話ほど苦痛なものではなかった。

どんな受け答えをしようかと思わず口ごもっていると、何を誤解したのか、自らも座ろうとして手をかけていた椅子を放置して、ラティーマの隣に跪くと、どうやら最初から準備していたらしい、小さいが高価そうな、美しい透かし彫りの入った白銀の腕環を取り出し、その手をとる——と、その瞬間。

（ティーマに触るな！）

リディの怒りが雷撃に変化する。

（殺しちゃダメ！）

「うあっ！」

あわてて心の中で叫ぶと、リディの攻撃の結果を予想して、思わず目を閉じてしまうラティーマ。

こうした精霊の一撃には、下手をすれば黒こげになっていておかしくないほどの威力があるのだ。が、どうやらミーシャは無事らしい。

（間に合って良かった……ダメでしょうリディ。こんな所で殺しちゃったら面倒が増えちゃうじゃない？）

「……驚いたな、ラティーマどの、我らにはどうやら運命の導きがあるようだぞ？ こんなに痺れたのは初めてだ」

中途半端に終わったリディの攻撃は、命を奪う代わりに、なにやらもつと別のものを奪ってしまったらしい。

「あなたは今の運命の一撃を感じたか？」

（どうして単なる「静電気」だっと思って思わないのよ！）

などと嘆いても仕方がない。たまたま力と知識のある上位の精霊と契約したラティーマだからこそ、「静電気」だの「電流」だのといった、精霊の血液ともいえる存在についても知っていたが、ヴォル族の大神官でも、そこまで詳しく理解している者は少ないのだ。

ましてやヴォル族が蛮族と侮る人族の騎士ふぜいが、そのような高度な知識をもっているわけが無かった。

「ああ、なんてあなたは愛らしいんだ。わたしはこの場で誓おう、あなたを全ての悪しきものから守ると！」

（黙れクズの出来損ない！・わ・た・し・の・ティード！もう二度と見るな触るな話しかけるな！）

（だからダメだってば！）

ミーシャの周囲にまといつき、今にも「喰らい」つこうという状態のリディを追い散らそうと伸ばした手が、誓いの言葉を終えて目を開けたミーシャの目にとまる。

「おお！ イエラ（レディ、淑女、貴婦人に対する尊称）ラティーマ！ 御手をお許しくださるとは！」

即座にラティーマの手をとり、その細い指先に口付けをするミーシャ。

（このおっ！）

（だからやめなさいっ！）

それを見ていた宿の主人は、後々まで自慢げに語ることになる。

「おれは、男と女が、本当に女神さまの導きで出会うとどんなに美しいか、この目で見た事があるんだ——」

攻撃の矛先をそらされ、プラズマ化した電子をもてあますようにまといつかせた精霊に包み込まれた、一組の男女。

優雅に椅子に座っているのは美しい巡礼の乙女であり、土間に適当な藁クズを敷いただけの床に跪いて、乙女の手口付けしている凛々しい男は、帝国が誇る近衛騎士である。

まさに幻想的といっても良い光景であり、古ぼけた宿屋の食堂などではなく、いつそティリスかソナスの大聖堂（どちらも女神の大神殿が有名。ティリスは女神ルティア、ソナスは女神アエリス）にこそ相応しいと思えるほどであった。

（お願いだから堪えて！ 以前みたいに延々と追い掛け回されるのはもう嫌っ！）

（ううっ！ ティーに触ってるよ！ コイツの体液が付いた！ ティーが穢される！）

ほぼ完璧に感情を隠したその顔はまるで、古代の名工の手による一個の女神像のような美しさであるが、ラティーマはそれどころではない。

そして、文字通り「雷撃」に打たれて恋に堕ちたミーシャは、口付けを終えて顔を上げ、ほのかな燐光に包まれて見える（実際には自身もそれに包まれている）ラティーマに、神々しいまでの美を感じ、これこそが、この女神とも聖霊とも形容しがたい女性を守る事にこそが、自身の騎士としての使命であると、改めて全ての神々に

誓うのであった。

騎士としての使命と運命の出会いに舞い上がっているミーシャは、大枚はたいて買ってきた腕環が黒こげになっていいる事などすっかり忘れ、跪いたまま陶然とラティーマを見つめる。

「あの？」

「はい、どうかこのミーシャに、なんなりとお申し付けください！」
それまでは完全に自己完結してしまっていたミーシャは、それがラティーマがこの日彼に初めて発した言葉である事すら気付いていない。

「いえ、騎士さま、どうか立って下さいませ、こんな巡礼ごときに膝については、近衛騎士としての軽重を……」

「イエラ！ 自らを卑下なさってはなりません！ あなたこそ我が生涯の誠と愛と忠誠を捧げるに相応しい方！」

（なにいつてるのコレ？）

（さあ？ リディが何かしたんじゃないの？）

「あのう……？」

「はい！」

（ティー、やっぱりコレ食べちゃおう。ものすごく面倒な事になりそうだよ？）

（そうね——いえ、ダメダメダメ！ 私が何とかするから、リディは絶対なにかしちゃダメ！）

パリッと大気に小さな破裂音が混じる。

「今日はいったいどんなご用件でいらっしゃったのでしょうか？」

ちらりと視線を入り口の方へと向けると、従者だか従騎士だかと思しき人族が数名、外から二人の姿を見て、路上に跪いているのが確認できるのだ。

一瞬なにやら考え込むようなそぶりを見せたミーシャだったが、右の拳を床に着いて、左手を胸にすると、頭をたれてしゃちほこばってそれに答える。

「申し訳ございません、あなたに伝えなければならぬ事があつた

のです」

なにやら無数の修飾語と接続詞と慣用句からなる、ミーシャの台詞を平たく言えば、まだ神殿に入るのは無理だから、もうしばらく待ってくれ。と、そういう事であった。

「……そうですか」

（どうしよう？ やっぱり忍び込むのが早いかも？）

もう面倒になってしまい、ミーシャの暑苦しい態度を無視する事に決めたラティーマが、思わずため息をついて思案に促されていると、それをどう勘違いしたのか、再びミーシャが声を張りあげる。

「イエラ！　どうかそんなに悲しまないでください！　ここは私に全てをお任せ下さい！　必ずあなたを祭壇へとお連れしてみせます！」

その声に驚いたラティーマが何も言えずにいると、騎士然とした、風を切るような颯爽たる動きで立ち上がり、店の外へ向かって再び大声をあげるミーシャ。

「テオドル！　バズレー！　待機中にある国境の全軍に召集をかける！　なんとしても神官を傷つけた犯人を見つけ出すのだ！　シヤルル！　魔導師とこのあたりの地形に詳しい学者を呼べ！」

外からミーシャの命令に応じる声が上がリ、幾人かが駆け去る気配を感じる。

「——イエラ・ラティーマ、どうかここで吉報をお待ち下さい、神官を傷つけた輩を捕縛し、それをもって交渉すれば、今は堅く閉ざされた神殿の扉も、あなたただけには開かれましょう！　では、私はこれで失礼いたします！」

……なにやら本気で大事になりそうであつたが、断固それは自分のせいではない、必死でそう思い込むと、テーブルの上で冷め切つてしまった蜂蜜と香草の「お茶」を手にする。

（暖めてくれる？）

湯気があがりはじめたそれを口にして、宿の主人が見ているのに気付き、内心の動揺を隠してにつこりと微笑みかける。

宿の主人は後に、自分は女神の化身にあつた事があるとも自慢する事になるのだが、このときはただ、あわてて宿からの「捧げ物」であるとして、代金も受け取らず、炉の上にあつたポットを丸ごとラティーマのテーブルに置くと、厨房の奥へと隠れてしまった。

（よかったねティー！ 飲めなかった分はちゃんと仕舞っておくからね！）

（……そう？ 良かったの？ほんとにこれでよかったの？ ねえ？）

（違うの？ 「タダ」だとティーはいつもうれしいでしょ？）

なんとも言えず、高山にしか育たない珍しい幾つかの野草の香りと、蜂蜜の芳醇な味わいを楽しみ、最後にお気に入りのマルゴーをちよっぴり温めてもらつてゴブレットに足す。

「美味しい——」

（美味しい？ うれしい？ もっとほしい？）

リデイがバラバラにして持っているのは、マルゴーだけではない。あまり大量に持たせるとリデイの身体という量が大きくなりすぎて、いざという時ラティーマの服の中とか床や地面に張り付いて消えるのが難くなるため、お気に入りの物をほんの少しづつしか用意していないのだが、液体やちよつとした食べ物など、眼に見えないくらいに小さくして運ぶくらいは、精霊にとっては簡単な事なのである。しかもそうして持っていれば、腐ったりしないのであるから、ヴォル領域にいる時のリデイの体は、どんなに小さくなくてもラティーマの周囲を漂う霧か霞といった状態にまで膨れ上がる。

ただ、リデイ曰く、これは一番基本的な精霊の能力の一つなので、材料が揃つてさえいれば、余程の物でない限り大抵の物を作り出せるらしい。

（これだけでいい。美味しいし暖かくなるわ）

（元気になる？）

（なった。だからちよつと散歩しよう！）

（わかった！）

……アルコールを摂取した多くの種族がそうであるように、ラティーマもこの時、自身の置かれている状況や課された任務や責任について、多少判断が甘くなっていたのだろう。

朝起きてからそれまで、多少水分の補給を行った程度で、ほかには何一つ口にしていないまま、かなりアルコール度数の高い飲料を飲み干してしまっていたのだ。

蜂蜜で口当たりの良くなって事も原因ではあるが、ラティーマの好むがままに味を整え、事実上の蒸留酒にすら匹敵するほどの強い酒となっていた「マルゴー」を、アルコール分を保持したまま温めて飲んでしまった事も原因かもしれない。

が、ともかく、普段であれば決してやらない事、すなわち、素顔を晒して人の多く集まる場所、市場、つまり、神殿の集まる広場へと向かってしまったのである。

（風が冷たくて気持ちいいね？）

（身体の温度が高いから？ 覚えておく？）

（大丈夫。ほら、いい匂いがする！）

（ティーが好きな匂い。でもティーの方が「いい匂い」だよ！）

リディとの会話に楽しげに微笑むラティーマは、彼女を見た者たちが、まるで自分に微笑まれたかのように感じて顔を赤らめたり、慌てて視線をそらせたり、果てはそれまでしていた事をすっかり忘れて、ふらふらと彼女の後について来ている事に、全く気付いていなかった。

そしてリディもまた、精霊らしい無頓着さを發揮して、放出することの叶わなかった遊離電子を薄く静電化して保持しており、それが時折周囲の大气に触れる事で微かな光を放っているのをそのまま放置していた。

当然の事ながら、高原の陽射しの中ではほとんどその光は見えないにしろ、彼女が歩くたびに全身が淡く煌くように見えるのだけは避けられない。

まさに女神の化身の如き神々しさであり、彼女に続く人々が増えるに連れ、人々の熱気よって、より一層その神々しさが増していく。大した事をしているわけではない。

彼女は気分のままに、あちらの露天を冷やかし、お代をもらおうとしない挙動不審の店主がくれた串焼きに舌鼓をうち、行商人が量り売りしているマルゴーを味見してただけである。

背後で「祝福をもらった！」とか「わたしにも祝福を！」とか、なにやら少々騒々しい事になっているのも、全く気にしない。

その彼女が足を止めたのは、死にかけた人の気配に気づいたからである。

この街は古いヴォル族の砦の跡に造られた人族の街で、当然のように下水や水道の設備などは存在しないが、地下の所々に、ヴォル族の砦に造られていた下水の跡が残っている。

その一つに、傷の苦しみに喘ぐ人の気配をみつけたのである。もちろん見つけたのはリディであって、ラティーマではない。

（ねえティー、誰にも見つからないから、ソコにいる死にかけを食べてもいい？）

（え？ どこにいる死にかけ？）

ラティーマの言葉をうけて、リディが彼女の目にだけ、地下の立体的な投影図を描いてみせる。ラティーマのほぼ真下、三メートルほどの地下である。

（なんでこんな所に？）

即座にその人物に侵入可能な隙間を探しあて、いくつかの経路を表示するリディ。

（このどれかから入ったんだとおもうよ？ とても美味しそうなんだよ。これなら見つからないし、もうすぐ死んじゃうから食べてもいいでしょ？）

リディが美味しそうと言うからには、マナやオドの量が多い人物なのだろう。そしてもうすぐ死ぬというからには、おそらく病気が怪我をしているのだ。

（ダメよ！ まだ生きているなら助けなきゃ！）

（どうして？ ティーとは違うよ。いらないよ、食べちゃおうよ！）
（だめ！ この入口はどこにあるの！）

「あの、御使い様、どうされましたか？」

顔を顰めて大地を見つめ、立ち止まっているラティーマを不審に思ったのだろう。一人が勇気を振り絞って声をかけてきた。

御使い様、というのが何を示しているのかはわからないが、ラティーマにとっては渡りに船である。

「手伝ってください」

なんの説明もなしに、近くにあつた露天の後ろ、荷物が山積みになされていた場所を空けさせると、木の板で覆われた、敷石の崩れた跡があらわにされる。

どよめきが上がるなか、身体の細い小柄な男を近くに呼ぶ。

「あなたなら行けます。助け出してください」

（リディ、この人に精霊の目をかしてあげて！）

（わかった）

どうしてよいのか分からずうろたえていた男に、ふわりと手をかざしたラティーマから、爽やかな香木のような香りが漂い、突然視界が明る輝いて見えるようになった男は声を上げてしりもちをつく。
「さあ、何をしているのです！ いきなさい！」

驚愕と恐怖に、転がるようにして、慌てて暗い穴の中に飛び込む男を見送り、目を閉じて佇むラティーマ。

その目にはもちろん男の様子がみえている。一体自分の身になにが起きているのかわからず、遅々として先に進まない男に業を煮やして、リディに言葉を届けてくれるように言うと、突然声をあげるラティーマ。

「急ぎなさい！ 人が死にかけています！」

もはや市のある広場は静まりかえっており、町中の人々が固唾を飲んで見守っている。

しばらくして、穴の中から先ほどの男の声が聞こえてきた。

「おーい！ だれか！ ロープを投げてくれ！ 人が倒れてるんだ！」

途端におおきなどよめきがあがり、ばたばたと人が動いて、近く
の露天からロープを借りると、それを穴の中に下ろす。

直ぐに反応があり、力自慢らしい数人の男達が慎重にロープを引き
上げると、ぐったりと気をうしなっているらしい男が引き上げら
れてきた。

どうやら未だ生きている事を確認し、足首の捻挫と腕の骨折、そ
れから化膿した刃物の傷を見て顔をしかめる。瞳の色はわからない
が、青みがかった暗い紫色の髪をした青年である。髪の色や服装か
らして、エルシアの山岳民の青年であろう事は予想できる。

（一体あんな所で何をしていたんだろう？ ずいぶん酷い怪我をし
てるわ。ねえリデイ、オドならちよつと食べてもいいから、この人
の傷を治せる？）

（熱を持つてるところだけなら治してもいいよ？）

（やって！）

それからの騒ぎはこれまでの比ではなく、流石のラティーマも、
自分が少しだけ（？）失敗したらしい事に気づいていた。

（ねえ、リデイ、なんだか、みんな、私の事を見てない？）

（さつきから見てるよ？）

酔いが醒めてきたという事情もある。

彼女をみてひれ伏している者さえいるし、多くの者が、彼女を見
て自身の最も信仰する神への祈りの言葉を唱えている。

近くで見つめている者に適当な愛想笑いを振りまき、どうやって
この場を切り抜ければよいのか思案していると、なにやら叫び声と
怒鳴り声が聞こえてくる。

（あれ、たしか、あの騎士さまじゃない？）

（そうだね何か怒ってるよ？）

（ほんと？ どうしよう？）

（あ、もう怒ってない——）

「おお、イエラ・ラティーマ！ あなたでしたか！ これは、一体何事です？」

人ごみを掻き分け、ラティーマの前に跪いてその手をとる騎士をみて、戦々恐々としてなりゆきを伺っていた周りの者たちまで、全員がその場に跪いたり平伏する。

代官さまと同じくらい偉い騎士様が跪く相手なのである。街の人々はこれで、ラティーマはこの街の代官よりも偉い人、つまりこの街にある神殿の神官と同じくらい偉い人であると認識した事になるが、恋する男にそのような些細な事を気にする余裕などない。

困惑顔で見つめ返すラティーマ気付き、自分がこの場を任されているのだと考え、近くで平伏してる男に事情を聞きつつ、部下を呼んで解散させるように言う。

もちろん街の人々にとっては、そのような事を聞き入れるなどともならない事である。

突然街の神殿の全てが「忌み」入りして、誰一人立ち入る事ができなくなった挙句、人々の信頼の厚い、エディウス神殿の神官が何者かに襲われるという事件がおき、何かよほど良くない事でも起きるのではないかと、日々不安の中に暮らしていた所へ、女神の化身とは思えないような美しい人が現れ奇跡を起こしたのである。

どうやらその女神の化身に、危害を加えるような事は無いらしい事は見てわかるが、街の人々には、ミーシャの態度が彼女を独り占めしようとしているようにしか見えなかったのである。

多少街の人々とは理由が違うとはいえ、まさしくミーシャはその通りの事を思っていたため、街の衛士と騎士団が率いてきた兵士達が集まるにつれ、街の人々と兵士達の間で、急激に緊張が高まっていく。

（どうしよう、このままじゃ暴動になっちゃうわ）

（そしたらそれに紛れて消えちゃおう）

（だめよ、そんな事になったら沢山人が死ぬかもしれないでしょ？）

「ミーシャ様！ ミーシャ様！ その男です！ その男です！」

と、同じ言葉を何度も繰り返しながら、神殿から見ていたらしい一人の男が、人ごみを掻き分けラティーマ達の方へと駆けてくる。どうやら男はエディウス神殿の神官らしい。ラティーマがその事に気づいた瞬間、人の言葉の形をした爆弾を投げつけてきた。「神官長と争って傷を負わせたのは、間違いなくその男です!」どうやらこれから始まるらしい、真の面倒事の予感に、ラティーマは呆然とするしかなかったのであった……。

天空の道 04 ラティーマ（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。
よろしく願います。

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>

天空の道 05 ラティーマ

ラティーマの目的は、結局果たされなかった。

神々はここでも沈黙しており、指示された通りの捧げ物と儀式を行ったにも関わらず、なんの言葉ももらえなかったのである。

（どうしてなにも言ってくださらないのかしら？）

（知らない。いつだって何かつまらない事考えてるんだよ。気にしても仕方ないよ）

リディの言葉は冒涇そのものであったが、おそらく聞こえているはずのこの言葉にさえ反応してくれない。

（リディ、神々は確かにここにもいらっしやるのよね？）

ふと、神々が失われた神殿の話を思い出し、胸が痛くなるほどの恐怖と緊張を感じながら聞く。

（うん。ティーを無視するなんて最低だ。——最低だよ！……ダメ。無視して誰かと話してる）

「え？」

思わず声を漏らしてしまい、それが祭壇の間に響き渡る。およそ祭壇は三エリ四方（約四五メートル）の広さがあるが、微妙に角度のつけられた天井と壁面の形状によって、小さな声でも実に良く響くのだ。

入り口のところで控えの神官見習いが、交代でなにやらいやらしい目付きをして見ているため、リディはラティーマの服の下に結晶のようになつて潜んでいる。

見つかる心配は無いだろうが、祈りを捧げているはずのラティーマが、祈りの言葉以外の声を出すのは不味い。

（リディ、一体神々が誰と話してるっていつの？）

（わかんない。でも声はしてる）

ため息をついて、一瞬諦めかけたところで、もう一つ疑問が浮かぶ。

（リディ、何処の、誰かと話してるの？）

（もつと東。それ以上はわかんない。多分とっても遠いところ）

大きな手がかりであつた。

神々はただ沈黙しているのではなかったのだ。誰かと話しているから、こちらの声がとどかないにちがいない。

すぐにも使い魔にできそうな魔物を探して、手紙を持たせて送らなくては！

そう決心したところで、誰かが祭壇の間に入ってきた。祭壇の前にひれ伏しているラティーマには見えないが、リディを通して見れば、それが神官補のルメイであることがわかる。ラティーマの様子を確認して、「ずっと祈り続けています」との見習いの言葉を聞いたルメイが、おもむろに声をかけてきた。

「イエラ、そろそろスクルの祈りの時間です。皆が扉の外でまっておりますので……」

申し訳なさそうな声だが、その響きに多少の違和感を感じる。

ともかく、そろそろ追い出されるのは仕方がない。エリ・スクルから六クーアもの間、一人で祭壇を占領していたのである。

「もうしわけありません、時を忘れておりました」

「とんでもございません、勤めがなければ何時まででもそうしていただいてけっこうなのですが——」

と、気持ちの悪い目でラティーマを見つめるルメイ。

「わかっております。女の身は修行中の若い神官には邪魔でありましょう」

「もうしわけございません」

最後にもう一度だけ祭壇に拝礼すると、立ち上がり、祭壇の間を出る。と、神官見習いだけでなく、巫女見習いらしい女たちまでそこにいた。珍しい事である。

（リディ、さっきの、誰かと話してるって、他の神々も同じなの？）

（わからないよ。竜の声なら時々聞くけど、神々なんて関係ないもの。それにものすごく耳を澄ませてないと聞こえない）

と、それはラティーマも初耳であった。

（耳を済ませれば神々の声が聞こえる？ それに、リディは竜の声がわかるの？）

（あんなのー〇〇〇リーグ離れてたってわかるよ！）

どうやらリディは竜が嫌いらしい。

（竜が嫌い？）

（嫌いだよ！ 竜は魔物だろうが妖魔だろうが、仲間の竜や精霊や神々だって食べるんだよ！）

それは神殺しの竜の伝説の通りである。つまり、リディの言う竜は、伝説の神殺しの事なのだ。

（それじゃ、本当に伝説の神殺しの竜なんていたの？）

（いるよ、この大陸の神々と争ったって竜でしょ？ ずっと北の海の向こうの大陸に棲んでる）

と、結晶となっていた一部を解いて、ラティーマにわかりやすいよう、簡単な地図を描いてみせてくれる。

つまり、その場所に、伝説ではなく、未だにそんな竜が存在しているということだ。

寒さと恐怖に背筋に冷たいものがはしる。

なにやら叫び声か悲鳴のような声まで聞こえて、まるですぐ後ろにその伝説の竜が迫っているような気分になり、どんどん足が早くなり、息を切らして暗い神殿の回廊を抜け、神殿側面の通用口にたどりついた時には、薄く汗を滲ませていた。もちろん気付いたりディがすぐに綺麗にしてしまう。

だが、まだここは標高が高い。ほんの六〇七エリ（一〇〇メートル前後）ほど走っただけなのに、膝についてしまいそうなほど息が苦しかった。

（リディ、おねがい、息が苦しい……）

（あ、まって——）

と一瞬全身が締め付けられるような感じがしたあと、ふわりと解放され、その後徐々に息が楽になる。

（ありがとう）

リディの力は本当にすごい。

以前他の精霊使いに聞いたら、リディの力に目を丸くしていたのを思い出す。

下位の妖魔や魔物ならともかく、上位の妖魔まで食べてしまうというのは、精霊としても桁外れの力らしい。

それに、精霊に食事として魔物を食べさせる時は、普通精霊使いが倒すか、弱らせてから与えるものなのだ。

リディのように、勝手に身体の一部を分離して、勝手にそこらの魔物や妖魔を食べるなど、聞いたこともないらしい。

（危ないからずっとはダメだからね？）

（わかった）

何が危ないのかはわからないが、長い間はだめらしい。

それでも、一息ついたラティーマは、背後を振り返り、人を集めた祭祀を行う広間（幅六エリ、奥行き九エリの広さで、壁は無く天井があるだけ）とその奥に見えている、閉じられたままの祭壇の間の大扉を見て、呼吸を整える。

（ねえ、リディ、その竜は今はどうしてるの？）

（寝てるよ？ 一〇〇〇年くらい声も噂も聞いてない）

（一〇〇〇年！ じゃあ、もしかして死んだんじゃない？）

（ティー。本当の竜は死なないよ。神殺しの竜達は、一瞬で全身を焼き滅ばさない限り死なない。でもとっても大きいから、そんなの絶対無理だよ。だから生きてる）

「達?! あ……」

驚きに声をあげ、誰もいない事を確認して胸を撫で下ろす。

（なに？）

（たちって、神殺しの竜って沢山いるの？）

（いるよ？ 二〇はいたと思う。今起きてるのは神々は食べた事が

無い竜だけど、ずーっと西の海を越えた大陸のその先の海にいる。
次はこの竜が起きるんだろ？)

(はい？ それって、どういうこと？)

(神殺しの竜が、いちどに二つも三つも起きてたら、みんな大変で
しょ？ だから何もなければ、一度に一つしか起きない。余程の事
がなければ、一つ以上の竜が目覚めるなんてないよ)

リディの言葉に、意味が分からず混乱しながらも、一番気になっ
ていた事を確認する。

(えっと、もしかして、神殺しの竜は必ず神々を食べるわけじゃな
いの？)

(そんなことしないよ、なんでも食べるけど、神々を食べるのは大
変なんだよ。すっごく強いもん。確かに美味しいけど、北の竜みた
いに、わざわざ好んで神々を食べるなんてしないよ)

聞いているうちに、安心したり不安になったり、頭と胸がぐちゃ
ぐちゃになってきたような気分になるラティーマ。

(ひとつ聞いていい？ もしかしてリディは、神々を食べたことが
あるの？)

(あるよ、美味しかった。でももう二度と食べたくない)

思わずしゃがみ込んで頭を抱えるラティーマ。

要するに、神殺しは竜だけでなく、精霊にもいて、神につかえる
自分の精霊が、その神殺しの精霊なのだ。

そんなこと、絶対だれにも言えないわ……。

(ティー、大丈夫？)

(もしかして、神殺しの精霊って他にもいるの？)

(知らない)

(じゃあ、なんでリディはしたの？)

(お願いされたから)

(誰に？)

(他の神)

ぞわり、と全身の毛が逆立つような感じがして、再び背筋に冷た

いものが走る。

精霊や神々の世界の事には、ほとんど興味をもった事のなかったラティーマだが、聞けば聞くほど、なぜかわからない恐怖を感じる。

（リディよりも強い神々を、どうやってリディは食べたの？）

（狂って壊れたところを食べたの）

（神が狂って壊れた？ どうして狂ったの？）

（その神が大切にしていたものが、全部食べられちゃったから）

（……リディが食べたのね？）

（あたり！）

（その神が大切にしてたものってなに？）

（人の街）

（……神が、他の神を殺すために、精霊を使って、人を殺したのね？）

（そうだね！ そういえるよ！ ティーすごい！）

ラティーマは、なぜ自分が恐怖を感じたのか、ようやく理解できた。

お願いされたから。

それだけであっさり人の街を食べる。おそらく食べ尽くしたのだろ。

リディなら、なんの疑問も躊躇もなく食べるはずだった。

防壁や人の魔導師や神官など、リディがその気になればどうやったところで防ぎようがないだろう。

人とは全く違う世界に生きていながら、すぐ隣りに存在し、なにかあれば人には抗う術が無い。

それが竜や神々や精霊なのだ。

「……どうして？」

（なにが？）

（なぜ神が神を殺そうとするの？）

（知らない。だって、もう神々の争いなんてないもの）

ふと、自身も、神々の言葉をうけて、人やヴォルやプリマを殺し

ているのを思い出し、自身の勤めもそういう事なのでは？ と恐怖しながら聞いたのだが、なにやらラティーマの意識に引っかかる部分があった。

「……………ちょっとまって？」

（いいよ？）

（もう、神々は争ってないって言った？）

（そう）

（それじゃ、リディが神を食べたって、いつの事？）

（けっこう前）

精霊らしいと言えば精霊らしい。

時間などどうでもいいだろう。

（何アルノー前？）

（五三八アルノー）

最後に人を巻き込んだ神々の戦いがあった頃である。

（——って、それじゃ、暗黒の時代の事？！）

（そうかも？）

（リディ？　もしかして、リディに他の神を食べるようにお願いしたのって、暗黒神？）

（今はそうとも呼ばれてる）

つ、つまり、リディはその昔、暗黒神の手先、暗闇の尖兵だったってこと——？

……………リディ！　なんて恐ろしい子……………！

（い、いまはその神とは関係無いのよね？）

（死んじやったもの）

そう、やっぱり英雄ギルムンドの伝説は正しいのね……………と、それまでラティーマを包んでいたリディが姿を消す。

「イエラ？　そんなところでどうされました？」

ルメイであった。

スクルの祈りは終わったのだろうか？

「え？　あ、気付きませんでした、帰ろうと思っていたのに……………」

と、ラティーマの声が疲れきっているのに気付いたのだろう。

「ああ、確かにお疲れでしょう。あんなに真剣に祈りを捧げれば、誰でもそうなりましょう……少し休まれて、いや、お泊りになってください。空いている部屋もございます」

一瞬それには惹かれたが、ルメイの好色な目に気付いて怖気はしり、さらにルメイに複数の男と女の匂いが付いているのに気付いた。

神殿に腐臭が漂ったような気がして吐き気がする。

もう今夜はアルコール無しでは眠れそうになかった。

「いえ、大丈夫です、十分休ませていただきましたから」

と、ルメイが何か言うのを無視して、夜の街へと出て行く。

考えてみれば、ラティーマはリディの事をほとんど知らないのだ。ものの心ついた時には、既にリディに包まれていた。

当時の記憶は臃でほとんど何も覚えていないが、その頃からすでにリディはリディであり、それ以上でもそれ以下でもなかったのである。

再び結晶を解いたリディに、音と姿を隠してもらい、暗い夜の街を、宿に向かってゆつくりと歩くラティーマ。温度の調節は簡単だが、空気が薄いのはやはりつらい。

空気を濃くする事も出来るが、せっかく身体が慣れてきたのに、また元の状態に戻るのは嫌だった。なにより、それはリディの消耗が激しい。

「ねえリディ、リディが生まれたのは何アルノー前なの？」

辺りを気にせず自由に声が出せるようになって、ラティーマは気分が楽になったらしい。

普段の通りの声にもどっている。

(三五―ハアルノーだよ)

それはつまり、この大地と同じくらいの歳月だということだ。

リディの知る膨大な物語や知識、圧倒的な強さの秘密が、少しだけわかった気がするラティーマ。

「すごいね、だからリディは強いんだ」

（そう！ 強い！ だからティーを守る）

自身の知る伝承から、リディを産んだのが、おそらく黄昏の神々と呼ばれる神話の時代の神なのだろうとあたりをつける。

「リディは黄昏の神々が産んだの？」

（違うよ！ 目覚めさせたの！ 精霊はもつと昔からずーっといたんだからね！）

なにやら自慢気なリディに、ふーん、と、納得したようなしないような声をあげたラティーマだったが、それ以上は聞かない。聞くとしても、話が込み入っていると、リディの説明では訳がわからなくなるに決まっているからだ。

「それから何をしてたの？」

（望まれるすべて）

つまり、リディが望みを聞きたいと思う相手の、その願いを叶え続けてきたのだ。

「リディが沢山いたら、きっと苦しむ人なんていなくなっちゃうね？」

何気なく言った一言だったが、リディはそれに反対する。

（ダメ。ティーみたいじゃないと）

自分の何を見て、精霊の使い手に相応しいと思ったのか、ラティーマには全くわからない。ラティーマは魔法も使えなければ、なにか特殊な能力があるわけでもない、ただの人なのだ。

だが、考えて見れば、魔法使いには精霊の使い手が一人もいない。全ての精霊の使い手は、なんの変哲もないただの人だった。たぶんただの人であることに、精霊にはなにか意味があるのだろう。

「リディ、これからもずっと守ってね」

（大丈夫！ ティーは死ぬまでティーだもん！）

と、宿屋が見えたところで、周りに誰もいない事を確認し、姿を現し、声をかけられた。

「イエラ・ラティーマ、やはり精霊使い、だったか」

闇に同化していた男。

内心飛び上がるほど驚いたラティーマであつたが、使徒として植えつけられた本能在、即座にラティーマを戦闘状態へと導く。

相手も同じ精霊使い。ただ、見ただけでわかる。リディの方が遙かに強い。

精霊同士が戦う事はまずない。戦う前に勝負がわかるから。精霊の力が拮抗しているか、その差が僅かであれば、使い手同士が戦う事で決着がつく事もあるが、男の精霊とリディであれば、いざとなれば、男を精霊ごと丸呑みにしてしまえるほどの差がある。

「あなたは？」

「私はアデルノ、見ての通りの精霊使い」

それはリディの知らない相手、つまりヴォル族の使徒ではない。だが、敵ではない。なにより、ラティーマに危害を及ぼせる相手ではない。

「実はお願いがあつて参上した」

（面倒になるかな？）

と思わず普段通りにリディに語りかけたところで、男が苦笑した。「そう面倒にはならないはずだ」

そういえば、精霊使いであれば、ラティーマとリディの会話は聞こえるのだつた。

思わず赤面して視線をそらしつつ、そのお願いが何かを聞いてみる。

「まだ先の長い旅ですので、お願いと言われても、聞くことが出来るかどうかはわかりませんが、それで良ければ仰ってください」

と、不意に男が闇に姿を消し、ほとんど同時にリディもラティーマの姿を隠す。

宿から数人の武装した男が出てきたのだ。

なにやら鋭い視線を周囲に向けているのは、ミーシャである。しばらく息を潜めて見ていると、なにやら頭を振って、脱力している。よく見れば、その手には花束が握られていた。おそらくラティーマ

マへの贈り物であろう。

なにやら意気消沈した様子で再び宿の中に入っていくのを確認し、アデルノが精霊の声で続ける。

（イエラ、このままで失礼する。先日助けていただいた青年がいただろう？ 彼を助けたい。このままでは、神官に傷を負わせた罪と、神殿を穢した罪で殺されてしまう。神殿の連中は、神々の沈黙をエルネダのせいにするつもりなのだ）

（エルネダ？ それが彼の名前ですか？）

（そうだ頼む。手を貸してくれ）

人の世に染まった神殿の、そうしたやり方は嫌いであつたが、神官の多くは魔法を使うのである。

（見つかったら面倒になるわ）

（助けなければ、エルネダは死ぬ）

（なら教えて？ どうしてエルネダは神殿に忍び込んだの？ どうして神官長に怪我をさせたの？）

と、当然の疑問であつたが、アデルノの答えは予想を遥かに超えていた。

（奴らは我々の神を盗んだのだ！ エルネダはそれを取り返しに行つただけだ！）

それで幾つかの疑問がとけた。

沈黙した神々に怯え、神々の代わりを求めたということだろう。愚かな話である。

（アデルノ達の神は沈黙していないの？）

と、その言葉に、アデルノは悲しそうに呟く。

もしかしたら微笑があつたかもしれない。そんな呟き。

（我らの神は、遙か昔に天に還つた。今あるのは抜け殻だけだ）

（どういう事？）

（エラトパタレナ。山の神の抜け殻。強く祈れば、音が出る。マナを使って語りかければ、声が出る。小さな象だ。そこにはもう神はいない。だが、我らの一族は、それを使って結束を維持してきた）

（神官達はそれを知らなかった？）

（知るわけがない。それに、気にもしないだろう。連中にとっては神の抜け殻ではなく、便利なただの道具だ。使い方は精霊使いならもちろん、魔道士ならすぐわかる。神官連中は今頃小躍りしているだろうよ。直ぐにも祭りだ。神の声が戻ったとしてな！）

憤りは、神官達に向けたもののなか、それともそんなもので一族を欺いてきた、自分たちに向けたもののなか。

おそらくその両方なのだろうとラティーマは思う。

（あなたが取り返したいのは、エルネダ？ それともそのエラトパタレナ？）

（決まっている！ エルネダさえ取り戻せば、あんなもの、いくらでも連中にくれてやる！）

（エルネダは、大切な人なのね？）

（妹の子供、俺の甥だ）

それを聞いて、ラティーマが迷っていたのはほんの数マイル（一マイル＝約三秒）であった。

（どうやって取り返すか、その方法を考えましょう。腐った神官達にも罰を受けてもらわなきゃ……）

天空の道 05 ラティーマ（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。
よろしく願います。

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>

天空の道 06 ラティーマ

——もし仮に、エルネダを上手く救いだしたとしても、エルネダの罪は、神官長への暴行であり、その罪は非常に重い。

未だ到着はしていなかったが、ラティーマはミーシャが国境から大規模な部隊を呼び寄せた事を知っており、なんだかんだで優秀で愚直なところがあるミーシャが、再びエルネダを捕らえるために、その軍を動かすのは間違い無いと思っていた。

そうなれば、山の民達の生活は、おそらく徹底的に破壊されるだろう。

当然、エルネダの罪を帳消しにするか、でなければ有耶無耶にする必要がある、個人的な義務感手伝って、それには神官達の不正や腐敗の事実を明らかにして、罪を問うなりなんなりが必要だと考えていた。

「それには——アデルノ、あなたには、ミーシャ卿に全てを伝えていただきます」

と、アデルノが慌ててそれに反対しようとするのを押しとどめる。「大丈夫です。私も神官の不正と腐敗の事実を伝えて、なんとしても、あの騎士を味方に引きこんでみせます。それに失敗したら、その時は私が責任をもつてあの騎士を消します」

ラティーマの瞳と声に、違えようのない決意を感じて、アデルノが頭を下げる。

「こんな、厄介な願い事を……」

と感極まった様子で頭を下げるアデルノに、ラティーマは厳しい表情を崩さずに告げる。

「あなたの願い事を聞くではありません。取引です」

その言葉に顔をあげたアデルノを見て、微笑む。

「エラトパタレナは私が貰います。それから、あなたにも精霊使いである事を明かしていただきますし、失敗した場合には、全てを諦めて姿を消してください。私もそうします」

かなり都合の良い、とても公平とは言えない取引であったが、アデルノに否やはない。

「甥が、エルネダが助かるのであれば、どんな事でもしよう。例えばイエラが悪魔であっても、私は取引をしたでしょう」

（悪魔は失礼！ ティーに謝れ！）

突然声をあげたりディに、ラティーマとアデルノが顔を見合わせ苦笑する。

「イエラ・ラティーマ。謝罪する。あなたはまるで女神の御使いのような方だ」

（ティー、よかったね、女神の御使いだった！）

アデルノの言葉に多少の照れを感じつつ、さらに細かく計画をつめてゆく。

それはまるで使徒同士の共同作戦のような感覚であり、しかもこれは誰かを殺めるものではなく、救いだす事を目的としてみる。

幾つかの段階にわけられた計画練りつつ、ラティーマは心が沸き立つような喜びを感じていた。

「では、すぐにも参りましょう。幸いミーシャ様がおられるようです。私が先に人払いをしておきますので、後から入ってきてください」

「——イエラ・ラティーマ、私は帝国の騎士として、そのような不正と腐敗があるのであれば、けっして許しはしない。だが……」

真剣な顔で真っ直ぐ見つめてくるラティーマに、ミーシャの心が折れそうになる。

「仮にも神官補を捕らえるのであれば証拠が必要です」

と、かなりの早口で一氣に言い切る。

「一体どんな証拠が必要ですか？」

「その、エラトパタレナ、でしたか？ イエラの言うとおりの品が本当にある事、山の民を襲った者たちの誰かか、それでなければ、襲ってその品を奪う事を命じた者の証言、それから、忌み入りの神殿で、その、淫らがましい事を行っている者達の誰かの証言、このくらいでしょう。ですがどれも非常に難しい」

と、不意にミーシャが椅子を蹴り倒して立ち上がり、剣を引きぬく。

「イエラ、動かないように、なにやら異形の気配がいたします……何者だ？ 山の妖魔か？ 隠れていないで姿を見せろ！」

これには流石のラティーマも驚いてしまう。

精霊の目をもつラティーマであればこそ、密かに入って来たアデルノがわかったのだ。

魔法使いでも精霊使いでも、ましてや高位の神官でもないミーシャにどうしてわかったのだろうか？

そろりと、ミーシャの左手が左の腰に何本か並んでいる短剣の柄を掴んだ。

騎士に似合わず、この男は短剣も使うらしい。

「ミーシャ様、心配ありません。その者が先程いった、山の民です」
ラティーマの声に、滲み出すようにして姿を現すアデルノ。

「お初にお目にかかります。イエル・ミーシャ。精霊使いのアデルノと申します」

左足を引いて右手を胸に、僅かに腰を落として頭を下げる。

それは山の民に真似の出来る礼ではない。見よう見まねで同じことをしても、どこか違うのだ。

ミーシャもそれを見て、しぶしぶながら剣を収めるが、実にさり気無く、左手は軽く腰においている。

「まずは座りましょう」

ラティーマの言葉に二人とも素直に席につくと、アデルノは前置

きも無しに話し始めた。

「先程イエラ・ラティーマが語った事は事実です。神官達が神をも恐れぬ不正を働こうとしている事も、我らの村が襲われた事も。証拠はこれです」

と、腰袋から、エディウス神の紋章の入った御守が二つと、同じ紋章の入った護剣が一つ出てくる。

「詳しく話してもらおう」

重々しい、有無を言わせぬミーシャの言葉である。

流石は帝国の近衛騎士団で、一つの部隊を預かる人物だけある。

これだけでも相当の迫力であったが、アデルノにもなにか隠すつもりは毛頭無い。

アデルノの話は、凡そ三ビルド程前。未だ雪の残るルティアの初めに遡る。

それは、かねてより交流のあった行商人が連れてきた、エディウス神殿の神官みならいとの出会いから始まった。

布教やなにか政治的な目的でも無さそうな様子で、しばらく村で修行をさせて欲しいという言葉を、アデルノ達は信じた。

そうした事は以前より無かったわけではなく、この周辺でも最も高い場所にある彼らの村には、身体を慣らす意味もあり、海岸地域や他の標高の低い場所で生まれ育った者達が時折訪れ、しばらく村の者に混じって暮らすことがあったのである。

彼らは貴重な外貨をもたらしてくれるし、そうした者達が語る下界の暮らしは、娯楽の少ない村の者たちには大きな楽しみでもあったのである。

そして何事もなく一〇と数ファルスが過ぎたある朝、その男が消えた。

村の宝であるエラトパタレナも同様である。

村の者たちは驚き、呆れ、そして怒り狂った。当然であろう。

即座に追跡がはじまり、エラトパタレナを盗んだ男を、ブイスタナまでほんの二日のところで発見したが、抵抗され、村の男が一人

腹を切られ、アデルノはやむなくその者を殺した。

すぐさま神官見習いを送ってきたラシデリアの神殿と、中枢にあたるブイスタナの神殿に対し、抗議の使者が送られたが、その答えは意外なものだった。

どちらの神殿にも使者が伝えたような神官見習いはいないし、誰かを村に送ったという事実も無いというのである。

だが、護剣と御守の一つはその男の物であり、間違いない本物であつたし、盗まれた物かもしれないと、ラシデリアの神官補が、その二つの証拠を取り上げようとした事で、嘘をついていると思つたという。神官は神官であり、代官所の役人でも衛士達でも無い、盗品の捜査などには何の権限もない。即座につっぱねた。大切な証拠の品なのである。

嫌な予感がしたが、ブイスタの代官所に、「偽の」神官見習いが出て、盗みを働いたあげくに抵抗したため殺した事を報告したが、証拠の品は隠した。犯人が死んでいる以上、それ以上の捜査はされないだろうと思われたからである。

一応、村では、再び同じような事があるといけないということで、エラトパタレナは隠れ里に移し、村の警戒を強める事にしたが、相手の方が上手だった。

隠れ里はとづくに見つかっており、守りとして隠れ里にい村人のうち四人が殺され、二人が重傷を負った。エラトパタレナは奪われてしまったのである。

聞けば、村に向かう途中で道に迷つたということで、現れた五人の男たちは、見たところ随分酷い状態だったらしい。小さな凍傷を幾つも負っており、すぐには身動きもとれなそうな者ばかりに見えたという。

もちろん警戒はしたし、密かに村へ人を走らせたが、顔見知りのエディウス神殿の神官がいた事で気を許してしまったのだ。重傷で気を失って倒れていた二人以外、全員が殺されていた。

「重傷だった二人もすぐに死んだ。捕まっているエルネダの母もそ

の時殺された」

「その、顔見知りの神官というのは？」

ミーシャの冷静な声が問いかける。

「この街のエディウス神殿の神官長様だ。エルネダにとっては母の仇だ」

吐き捨てるように言う、その言葉に隠れている復讐心の強さに、密かに怯えるラティーマ。エルネダにとって母の仇であるならば、アデルノにとつては妹の仇である。

「それで、エルネダは仇討ちのために神殿へ？」

ミーシャの言葉に、まさか、と即座に否定するアデルノ。

「それはきつく禁じた。下手をすれば神殿と戦争になる。私は村のためにも危険を侵すわけにはいかなかったし、理由も知りたかった。交渉で、なんらかの補償とエラトパタレナを取り返すつもりだったが、エルネダは我慢が出来なかったらしい。奪い返しにいったのだ。私はそれを止められなかった」

激しい憤りと葛藤をそのうちに秘め、無念を吞んで堪えているのだ。

「すぐに助けにいかなくてはなるまい」

不意に、ミーシャが言い放つ。助けに行くもなにも、エルネダが捕まっているのは代官所の地下牢である。

今はミーシャの管理下にあるはずで、一応怪我は直したが、オド回復がおもわしくなかったため、尋問も裁判もまだ先の話であるはずだった。

「それだけの事をした以上、神官長も正規の裁判になどなつてもらつては困るはずだ。尋問でそうした背景が暴かれるのみな」

流石にわかつたのであろう、アデルノの表情が変わるが、不思議そうなラティーマが疑問を口にする。

「でも今は、あなたがこの街の代官みたいなものでしょう？」

「イエラ、確かにそれは間違っていないが、最高神エディウスの神官長の力というのは、ある意味で代官以上なのです。それに、正直

こんな事は身内の恥でしかないが、末端の衛士というのは、権威や賄賂に弱い。その両方を揃えられる神殿の使者が相手なら、平気で地下牢の鍵を置き忘れるでしょう」

だから救出するなら早いほうがいいという。

「でも、いくらあなたでも、咎人を勝手に出すわけにはいかないのでしょうか？」

「その通りです。何かみなが納得する理由を考えなくてはなりません」

そんなものがあるとは思えないが、なにやら真剣に考え込んでいるミーシャの邪魔をするわけにはいかない。

黙ってみていると、立ち上がったミーシャがおもむろに口をひらく。

「どう考えても時間が無い。イエラ、あなたはその、淫らがましい行いに参加していたという者たちがわかりますか？」

もちろんわかる。筆頭は神官補である。頷くと、間違いなくルメイはそれを知っているし、参加もしていると告げる。ミーシャはなにやら呟き、今度はアデルノを見つめる。

「それから、エラトパタレナは無理です。何処にあるかわからないし、神殿には手を出せません」

それはアデルノも諦めていた。何処に隠してあるかわからないし、知っているのは神官長くらいだろう。

アデルノが頷くを確認して、ミーシャが続ける。

「――エルネダですが、こちら難しい。裁判まで待つのは無理だし、裁判を経ていなければ、エルネダを自由にはできない」

その言葉に見殺しにするつもりなのか？ と、勢い込んで立ち上がるアデルノに、ミーシャが笑いかける。

「なので、顔を隠して無理やり奪い返しましょう。幸い、今夜は我が隊の者が街の警護を担当しています。侵入するのは簡単でしょう」
そのあっけらかんとした態度に絶句していると、真面目な顔を続けて続ける。

「その後、騎士団に自ら出向いてきたということにして、あなた方は私が保護します。もちろん裁判は受けていただきますが、我々が保護した場合、その権利は我々騎士団のものとなります。よろしいですか？」

ミーシャはアデルノが精霊使いであることを知っている。騎士団であれば、おそらく精霊対策の法具や魔道具も持っているだろう。

騎士団が裁判を取り仕切るのであれば、ミーシャが裁判官となるのだろう。神殿の力は強大だ。こんな山の民を一人か二人救うより、これを秘密にして神殿に貸しを作れば、近衛騎士としての将来は約束されたようなものだろう。アデルノは静かにミーシャを見つめながら、胸の内で呟く。

神殿の庇護を受ける近衛騎士か。栄達は思いのままだろうな。

一步ミーシャが横道へと足を踏み出せば、アデルノはエルネダを助ける事もできず、自身も命を落とすだろう。

だが、と、ミーシャを見つめるアデルノ。

少なくともこの騎士は、優秀なのだろうし、頭も切れるが、そうした卑怯な手段を用いる類の男ではない。

「お任せします」

その言葉に頷いたミーシャは、大声を上げて外で待機している副官を呼んだ。

「シャルル！ 入って来い仕事だ！ 酒は吞んでいないだろうな！」

軽く、神殿に不正の影があるとだけ言い、極秘に神官補を捕らえて拘束するように言う。

「団長？ 神殿と事を構えるつもりですか？」

冷静な声で確認をとるシャルルは、どうやら優秀な副官らしい。

そんな危険で困難な任務を、ほとんど説明も無しで事実上丸投げしている。

「極秘だと言っただろう？ 方法は任せるから今夜中に、誰にも知られずルメイを連れてこい！」

多少は緊張していたのだろうが、脱力したようにため息をつくシ

ヤルル。

「まさか、騎士団に入ってまで誘拐の真似ごとをする羽目になるとは……」

「昔の手腕は衰えてないだろうな？ 頼むぞ？ ああ、それから今夜代官所周辺の警備をしているのは誰だ？」

その言葉に不穏な気配を感じたのだろう。慎重にその質問について聞いたです。

「メシャロですが、団長、一体なにをするつもりなんです？」

「騎士らしい行いさ？ シャルル、まあ、仮に、だが、もし今夜メシャロの隊が、何か失態を犯しても、罰は軽く済ませてやってくれ。それから今夜の護衛はいらない。明日の朝にでもこの宿に迎をよこしてくれ」

その答えに天を仰いだシャルルであったが、「あんまり無茶はしないでくださいよ」とだけ言うと、外に残っていた隊員に声をかけ、夜の街へと消えていった。

「ではイエラ、よろしければ我々に祝福をお与えくださいませんか？」

貴族らしい、他の者が行えば嫌味にもなりそうな態度であったが、ラティーマは素直に立ち上がり、二人の前で祈りの言葉を唱えると、片手を上げる。

「あなた方に女神の祝福を。ルティアの御加護がありますように――」

しばらく下げていた頭を上げると、ラティーマに微笑み、アデルノと視線を交わすと、言葉もなくそのまま宿を出て行く。

（リディ？）

（なあに？）

「アデルノに声が聞かれないようになったら教えて？」

（わかった）

ラティーマも、今夜少し動いてみるつもりになっていたのだ。

天空の道 06 ラティーマ（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。
よろしく願います。

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>

天空の道 07 ラテイマ

神々の沈黙した神殿など、精霊使いにとっては無人の家屋同然の場所である。

リディはクーアもかからずエラトパタレナの隠し場所を特定し、それを盗み出していた。

ルメイの尋問という名の拷問による自白も得ており、神殿の腐敗と不正についても糾弾可能な材料は揃っているし、アデルノとエルネダについては言うまでもない。

翌日には騎士団の名の下に裁判の日程が公表され、三アルノー後には、関係する全ての者を召喚し、即日裁判が行われる事を、伝士が町中に触れ回っていた。

代官のユートブと、未だ内蔵の傷が癒えていないという、エディウス神殿の神官長アマウルなどが抗議に訪れたが、ミーシャはそれらを騎士団の権威と実力を背景に黙殺し、青くなったり赤くなったりしながら、必死で声を上げていた二人を追いついていた。

「くそ！ 忌々しい騎士団の連中め！ あんな連中だと知っていれば呼びつけたりなどしなかったものを！」

ユートブが苛立たしげに声をあげ、アマウルが呟く。

「しかし、いったいルメイは何処に消えたのだ？」

苦しげな息遣いながらも、その迫力はまさに最高神エディウスの神官長に相応しいものがある。

周りに集っている数人の神官見習い達については、言葉もないまま蹲っている。

神聖であるべき神殿の最深部、祭壇の間からは、廊下を挟んです

ぐの控えの間である。

とても控えの間とは思えないほどの、広くて豪華な装飾と高価な鉾樹の家具の配されているそこは、まるでどこぞの大貴族か大商人どもの居室の如き様子である。

真新しい後付の暖炉が据えられ、高価な鉾樹の枝の明かりを惜しげもなく周囲において、この街の者が一生かかっても、触れる事すらできないに違いない、高価な椅子の一つに座ったアマウルと代官のユートブは、前に膝を着いて控えている神官みならいに対し、なんとしてもルメイの行方を掴むように指示して下がらせる。

「……しかし、神官長様、これは大変不味い事態ですぞ？」

手にした水石（緑や青の、透明感のある石。翡翠が多い）の杯にマルゴーを注ぎ、一息に飲み干すユートブ。

「ユートブどの、そのくらいは言われんでも良くわかってる！」

あの野蛮な山人（やまびと、山の民、山岳民の事）どもが——……

まさか、ルメイは山人どもに捕まっているのではあるまいな？」

再び空の杯にマルゴーを足して飲み干すユートブ。どうやら喉が乾いて仕方がないらしい。

「ありえますな、ですが、問題は騎士団がどこまで気付いているかです」

眉間を揉んで立ち上がったアマウルが、手にしていた杯のマルゴーを飲み干した。

「あのぼんくら息子と名高いミーシャ卿が、これほど素早く手を打つてくるとは……噂などあてにはならんものだ」

「私もあれほど果断な処置がとれる人物とは思ってもおりませんでした。見た目は良くても、中身は空っぽ、いかにも女好きの、何処にでもいる貴族の馬鹿息子としか思えませんでしたからな？」

その台詞にアマウルが苦笑すると、なにやら呟き、いきなり手にした杯を暖炉に向かって叩きつけた。

「くそ！ わかったぞ！ ミーシャだ！ あやつがルメイを捕らえたに違いない！」

「し、神官長さま、それは大変ですぞ！ ああっ！ あの時私の言った通りに連中を皆殺しにしておけば、このような事にはならなかったのにつ！」

「黙れ！ こ、このままでは、我らのしてきた全てが——」

と、不意に軽やかな鈴の音のような笑い声が響いた。

「誰だ！」

「何奴！」

と、それまで誰もいなかったはずの部屋の片隅に、忽然と一組の男女が姿を表していた。

「もう呆れて笑う事しかできませんでした。私もまさかこれほど愚かな者たちであったとは、予想もしておりませんでした」

「女！ 何者だ！」

「私はたんなる巡礼の女、聞くのであれば、こちらの方に問うてはいかがですか？」

その言葉に、暗い部屋の角から光のとどく所へと移動してきた男。「き、きさまは——い、いや、ミーシャ卿！ 一体どうやってここに！」

完全武装の上完璧なまでにそれを着こなしている姿は、見る者が見れば、その武装に相応しいだけの鍛錬を積んだ頑強な肉体と、隙のない歩みに、かなりの修羅場を潜り抜けてきた、歴戦の強者である事に気付かされたであろう。

それまでアマウルやユートプに見せてきた、柔和で情弱な印象など欠片も無い、不敵な笑みを湛えた、そう、それはまさにミーシャ卿その人であった。

「歩いて入ったに決まっている。無用心な事だ。それに、話は全て聞かせてもらった」

その言葉に声を詰まらせ、顔を青くしているアマウル。

「随分とあくどい真似をしていたらしいな？ ユートプ殿、まさかあなたが山の民を攫って奴隷として売り払うことまでしていたとは、夢にも思ってもおりませんでしたよ」

「それに、罪もない山の民を襲って殺し、神具を奪うなど、神々が赦すはずがございません」

と、ミーシャの台詞に続けられたラティーマの言葉に、なにやら活路を見出したらしいアマウルが声を上げる。

「黙れ女！ 誰が山人を襲ったなどと！ そんな証拠が何処にある！」

「ありますよ。神官長さま」

と、突然そこに第三の声が響いた。

それまで確かに誰もいなかったはずのアマウル達の背後に、二人の人影が立っていたのである。

一人は紐につながれ、猿轡をかまされている。

「お前は！ アデルノか！」

と、叫んだ神官長の足元に、紐につながれた男が蹴り倒されて転がってくる。

「ルメイ！」

「ルメイさま！」

「山の民をお前達が襲った証拠ならアデルノが持っているし、そこにいるルメイが全てを語ってくれたぞ？ もはや言い逃れなど出来ぬ！ が、私としては無用な波風で民を煽るのは避けたい。そこで提案だ」

ニヤリと、人の悪い笑みを浮かべて二人を見つめるミーシャ。

「神殿に勤める全ての者には辞職してもらい、ロヴィーサの大神官の下で処罰を受けてもらう。心配しなくてもいい、死罪になるのは貴方だけだろう。他は奴隷に落とされる程度ですむはずだ。それからユートブ殿には、私財の全てをこの街に寄付していただく。そうすれば命まではとらぬ。余生はこの街で犯罪奴隷として生きるがいい」

どうだ？ と、つまらなそうに言うミーシャ。

「……くっ、ふ、はははははっ！」

と、不意にアマウルが大声で笑いはじめた。

「面白い！ 面白いぞミーシャ卿！ 私は随分と貴方を侮っていたらしい、それについては詫びを入れよう！ しかし！ たった三人で乗り込んでくるとはな！ 死ぬのは私ではない！ 貴方の方だよ！」

そう叫んだと同時に、暖炉の横に下がっていた紐を大きく引く。
——おそらく神殿中に響きわたったであろう、緊急を告げる鐘が鳴った。

「であえい！ 侵入者だ！ またしても山人の賊が侵入したぞ！」
その台詞にそれまで真つ青になって、わなわなと震えていただけのユートブが我にかえった。

「であえであえ！ 敵は騎士団長の命を奪いその装備を纏っている！ 騙されるな！ 山人の刺客だ！ であえ！ 皆殺しにしてしまえ！」

と、それまで何処に隠れていたのか、八名の神官見習いと、二〇名の腹心らしい、ユートブ配下の衛士がわらわらと飛び込んでくる。
「ふっ、お前たち、覚悟はいいか？」

すらり、と鈍い銀色の輝きをみせてミーシャが剣を抜き放ち、アデルノが嬉しげに腰の山刀を抜く。

「ミーシャ卿、約束です。アマウルの命は私がいただく」
「任せた！ イエラ下がってください！」

はい、と、ラティーマの声が聞こえたその瞬間、神殿裏手の中庭に面していた壁が、突然轟音を立てて崩壊し、ラティーマの姿が穴を潜って外に消えると、同時に激しい戦いが始まった。

ミーシャは、叫び声を上げて切りかかってくる衛士の剣を、火花を散らして剃り上げるにして弾くとその顔を横薙ぎにして、絶叫を上げる衛士を後目に、崩壊した壁から一步外に出ることだった主導権を奪い返す。

「さて、ひとつ揉んでやろう。命が惜しくないのは誰だ？」
その間に、アデルノは転がるようにしてその場を離れ、祭壇の間へと続く扉を抜けて廊下に出る。

アマウルはその場をユートブに任せると、六名の杖を手にした神官見習いを引き連れ廊下へと出て行く。

「騎士団員を騙るなど愚かな男だ！　だが、剣を捨てれば、せめて苦しまぬようにはしてやるぞ！　何をしている！　半数は裏へ回りこむのだ！　なんとしてもこの場で殺せ！」

衛士達のはじかれたように動きだし、ユートブの台詞に対するミーシャの返答は、火のように苛烈で激しい斬撃であった。

半月状にミーシャを包囲した衛士達が、これ見よがしにゆっくりと、一步内部に足を踏み入れたミーシャに対して、大声をあげて一斉に斬りつける。

「うおおおつ！」

「死ねええつ！」

どの衛士もそれぞれ思い思いの台詞で気合を発しているのだが、大別するとこの二種類ではない。

衛士達の実力を確認し、歪めた口元をそのままに、一本の剣を頭上で叩き、一本を返した剣で弾くのと同時に、他の剣が振り下ろされるよりも素早く、正面の敵に肩から体当たりでぶつかり、半包囲の輪を抜けると一回転、その勢いのまま、倒れている男の腕を断ち切るミーシャ。

「おのれ！」

絶叫を聞き、振り返って惨状を目にした衛士達が、次々に怒りの斬撃をくりだす。

が、ミーシャはそれを体術だけでかわしつつ、籠手を切り裂き、足を薙ぎ、致命傷ではないものの、防御の薄い場所を立て続けに切られ、突かれ、果ては同士打ちまでおこして、次々と戦闘力を失っていく衛士達。

戦いは、完全にミーシャのペースとなっていた。

その頃、祭壇の間へと逃げた（ように見える）アデルノを追ったアマウルと六名は、祭壇の前で、互いの武器を手にして向かい合っ

ていた。

「アデルノ、お前だったか。愚かで無能な男よ！ 神官の職を放棄して山人の元に残るなど、あまつさえ山女を娶るなど正気の沙汰ではないわ！」

「黙れアマウル！ 不正に次ぐ不正を重ねて己が野心を満たすため、罪も無い村人を何人も殺した罪、ウリアス女神が見逃すとも思っただか！」

「くつくつく、心配するな、神々は何も言わぬさ！ お前ももうすぐ何も言えなくなるのだ！ それっ！ やってしまえっ！」

六人の神官見習いの男達は、手にした杖を翳して、触媒を振るい、次々と呪文を唱えてゆく――が、何もおこらない。

「な、なぜだ！」

「どうして？」

「なぜ奇跡がうまれない！」

異変を口々に叫ぶ神官見習いに、今度はアマウル本人が、手にした宝玉付きの錫杖を取り出し、呪文を唱える。

「なぜだ！ これほどマナが濃いというのに！」

「……わからないのか？ それはマナではない、精霊さ――！ やれ！」

アデルノがそう言った瞬間、周囲のマナが風が変わって渦を巻き、全ての神官見習い達が首から鮮血を噴出し、崩れ落ちる。

「なっ！ なんだこれはっ！」

「言っただろう？ 精霊だ。マナを扱えない俺には魔法は確かに使えない。だが、山の神々が俺を哀れみ、俺に力を授けてくれたのだ。民を守るためにそれを振るえとな！」

言いながら近づくアデルノと、声も立てずに喉を切り裂かれて倒れた見習い達の姿に、恐怖と畏れが爆発し、くるりと背を向け走りだしたアマウルだったが、そこはまだ精霊の気の内にある。

突如として両の足首の筋を断ち切られ、叫び声を上げて転がる。

「や、やめろ！ やめてくれ！」

「お前の指示で、お前によって殺された者達も、きつと同じ言葉口にしただろう。みなの一〇分の一でも苦しんで死ねえっ！」

使い込まれた武骨な山刀が振るわれ、急所を外して、内蔵ごと腹部を切り裂かれたアマウルが絶叫する。

必死で回復の技を使おうとしているのが見てとれるが、既にアマウルには、マナもオドも残ってはいない。全て精霊に喰われた後である。

失血死するまでの短い間、オドを失い、全身の要所が腐り落ちるような激痛と、切り裂かれた腹の痛みに、意識を失うことさえ許されないまま、ただ悲鳴をあげ続ける事しか出来ない。

一瞬瞳を閉じて死んだ者達への、祈りの言葉を口にしたアデルノだったが、即座に山刀を一振りして、未だ剣戟の音の絶えない控えの間に向かって駆け出していく。

部屋に残っていた衛士の内、七人までもが戦闘力を失って悲鳴をあげており、中庭に回った者たちは未だ到着していない。

が、ユートブにはまだ余裕があった。切り札とも言うべき戦力が残っていたのである。

「そこまでだミーシャ卿！ 神々が沈黙したといえど、その奇跡は健在なのだ！」

突然ユートブの大喝が響き、ミーシャの背後にいた数名の衛士が飛び退くと、今まさに手にした炎を放とうとする二人の神官が見えた。

「シリレス（女神）の下で己の不明を悔いるがいい！」

「誰が悔いるの？」

と、ユートブが耳元で囁かれたような声を耳にした瞬間、炎を手にした二人に神官が、煙のようなモノに巻かれて絶叫を上げる。

炎は瞬時にその光を失い霞となって、手のひらから零れ落ちるようにして消え、呆然としていた二人の両手が、酸に溶かされでもしたかのように爛れ、指の先から瞬く間に、骨まで綺麗に消失してい

く。

悪夢と言つて良い。

両手を一瞬にして失つた神官の二人は、絶叫をあげながら、まるで全身に火でも付いているかのように、床の上をのたうち回るが、周りの者はあまりの光景に絶句し、呆然とそれを見守る事しか出来ない。

気付いた時には、血痕一つ残さないまま、二人は綺麗に消えていた。

「——ユートブ。終わりだ。武器を捨てよ」

首筋に突きつけられた、血染めのミーシャの刃がユートブに残されていた気力の全てを奪い去った。

その手から武器が落ち、自らの傷の痛みすら忘れて、たった今見た悪夢の光景にみ入っていた他の衛士達も、次々に剣を捨てる。息を切らせたアデルノが飛び込んで来た時、中庭に向かって開いた壁から、副官のシャルルがひよいと顔をのぞかせたところであった。

「終わりましたか団長？」

「損害は？」

シャルルの言葉には答えず、軽く肩をすくませるシャルル。皆無という意味であらう。

「シャルル、とりあえず神殿を包囲して誰も入れるな、逃がすな。

いいな？ お前は正面で指揮をとっている。それからこの者達を中庭で拘束しておけ」

「はい、団長」

シャルルのあとを付いてきたらしい配下の騎士達に、生き残りの衛士達を連れてゆかせると、一人残されたユートブに声をかけるミィシャ。

「元代官どの、死罪か、この場で自害するか？ 自害であれば、資産の没収は避けられないにしても、レンディー家で家族の面倒は見えてやろう。どちらがいい？」

しばし無言で俯いていたユートブが、ミーシャを見上げて微かに頷く。

黙って転がっていた剣を拾いあげると、ユートブに渡すミーシャ。アデルノが一瞬だけ緊張した様子を見せたが、結果は一瞬であった。「えいっ!」

ユートブは気合の声と共に、自らの首に当てた剣を一気に引き切ったのである。

「……終わり?」

と、そこでようやくリディの許しをもらって姿を現すラティーマ。

「一応な?」

「わかりました」

そう言って再び姿を消したラティーマに、ミーシャが声をかける。

「イエラ・ラティーマ、このまま行ってしまうのか?」

「はい」

姿は見えないが、壁の穴の方から声が聞こえた。

「イエラ、もう一度逢えたら、私の妻となってくださいませんか?」

「——考えておきます」

微かな笑いの含まれたその声を聞いて、剣を収めるミーシャ。

「アデルノどの、もう裁判の必要はなくなった。エルネダは連れて行ってくれてかまわない」

「ミーシャ卿、感謝する」

うむ。と頷き、壁の穴から中庭へと抜け出すミーシャ。

後から来たアデルノに、既にラティーマの姿が無い事を確認すると、おもむろに口を開く。

「アデルノどの、約束通り、精霊の加護を我が目に」

ニヤリと笑ったアデルノが、精霊となにやら言葉を交わす。

「ミーシャ卿、加護は貴方のオドから必要な魔力を吸収して持続しますが、慣れるまではあまり頻繁に使わない方がいいでしょう。暗い場所で練習し、最初は日差しの下ではつかわないようにしていた

だきたい」

「心得た」

ミーシャが感慨深げに、二つの月が照らす神々の峰を見つめていると、不意に、アデルノが呟くように言う。

「ミーシャ卿。山の民は、恋する人の元へと通う事を、天空の道をゆく、といいます。あなたが無事に天空の道を越えてゆけるように、心から祈っておりますよ」

この言葉に、ミーシャは大きく頷き、微かに笑った。

天空の道をゆく、か、悪くないな。きっと彼女の元へと続く道は、同じくらい険しいに違いないが、同じくらいに美しいだろう。

そう思ったのである。

天空の道 07 ラティーマ（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。
よろしく願います。

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>

森の妖精 01 ラティーマ

ラティーマがその広大な森へとたどり着いたのは、単なる偶然ではない。

ヴォル族に伝わる古地図を手がかりに、三ビルドもかけてアルシア帝国を横断し、ようやく発見したのである。

ラティーマの通った経路をみれば、あちらへフラフラ、こちらへフラフラと、無駄な動きだらけの行程であったが、目的地を探しながらの旅である以上は仕方ない。

手にした縮尺すらない簡単過ぎるほどの地図を、上にしたり横にしたりして見ながら、視線の先にあるソナスならどこにでもありそうな丘陵地帯の森林と、古い神殿の遺跡までの距離を、なんとか地図と一致させようとする。

（ティーマ？ 決まった？）

ずいぶん長いことそうして地図と睨めっこしていたラティーマだったが、どうやらようやく進む方向を決めたらしい。

「うん。泉が枯れてたり位置が変わってなければこの森で間違いないと思う」

（じゃあ行こう）

「行く。ねえリディ？ またお話して？」

（いいよ。どんなお話？）

「んー。任せる」

わかった。と、言うが早いか、即座に視界が薄い膜に覆われたようになり、目で見えている景色に全く別の風景が重なる。

（これは昔むかしのお話です……）

物語とともに進むおとぎ話の景色と、自身の目で見ている実際の風景の両方を同時に意識しつつ、リディが見つけた大昔の街道跡を辿るラティーマ。

もちろん全て草や土に埋もれてしまっており、そこが本当に街道だったとはとても思えない。

強いて言えば、リディが街道であることを示している場所には、確かに樹齢一〇〇年未満の木々しか生えていないため、一〇〇年ほど前までは人の手が定期的に入っていたのだろう、程度の認識である。

古地図によれば、神殿の遺跡から真つ直ぐ泉まで伸びる街道が存在する事になっていするため、逆方向に向かっているのなければ、ついでに言えば、ここが正しい場所であれば、リディの案内で自動的に泉の場所まで辿り着けるはずであった。

そして、その泉には、伝承によれば偉大な妖精の女王が暮らしているはずで、彼女に聞けば、ラティーマの探している「異変」のあった場所まで辿り着けるはずなのだ。

なんともあやふやで、どこまで頼りになるのか見当もつかない情報ではあったが、この数ピルドの間、当てにしていた神殿や社の全てを巡り尽くしてしまっているのだ。

この地図が外れたった場合、こんどこそ一から情報を集めなおさなくてはならない。

「ねえリディ、妖精には会ったことある？」

（あるよ）

「妖精ってどんな人だった？」

（妖精は人じゃないよ）

「知ってる」

（よかった）

その沈黙に、リディが自分の質問の意味を理解していない事に気付いてため息をつく。

「妖精って、どんな事してるの？」

（いろいろだよ）

「例えば？」

（幾つくらい知りたいの？）

「いくつくらいあるの？」

（三百十二万七千八百五十二通り）

数字に強いヴォル族の中で育ったラティーマにとっても、それはあまりにも大きな数字であり、理解が及ぶところではない。

もちろん一〇〇を超える桁の数字は、大半の人族にとっても縁の無い世界であり、それに比べればラティーマはまだましというレベルではあった。

「じゃあその最初の一つを教えて？」

（ティーが知らない言葉だけどいい？）

「わかるように教えて」

（土を細かくする）

なるほど。

と、あふれる疑問は横におき、とりあえず納得してみるラティーマである。

別に妖精がしている事に納得したのではなく、リディの言葉をそのまま受け入れただけで、その行為にどんな意味があるのかについては理解していない。

「他には？」

（マナを運ぶ）

一瞬どこからどこへ？ という疑問はわいたものの、どうせ聞いても理解できないだろうと思い直すラティーマ。

「不思議な事をしているのね？」

（それが仕事だよ）

ふーん。と適当な返事をして、気付けばそこは件の神殿跡であった。

空もろくに見えないほど深かった森が、そこで突然開けたのである。

昼なお暗いと形容されるべき森から、このように突然陽の光の元に飛び出してしまったようなラティーマには、そこはあまりにも眩しい光の世界であった。

が、よく見れば街の城壁に使われているような、綺麗に切り出された大きな石組の壁がそこかしこで崩れて蔦や草木に覆われ、隙間なく敷き詰めてあったらしい、当時は白く輝いていたに違いないであろう敷石も、今は無残に割れたり、隙間から根をはった木々によってめちやくちやにされてしまっている。

その、どうやら神殿前の広場であつたらしい開けた空間の真ん中を、少々場違いに見えない事もない、水辺に育つ背の高い草が一系列に茂っているのが見える。

どうやら神殿の方から水が流れてきているらしい。

「これが神殿の跡だよね？」

（神殿だね）

今は崩れてしまっていて往時の面影など欠片も無いが、それでも、草木の奥に積み重なっている石の小山を見れば、おそらく相当巨大で立派な建造物であつたのは間違いないだろう。

「泉はあの神殿の奥かな？」

（そうだね）

特に興味も無いらしく、リディの返事は実にそっけないものである。

それよりなにより、魔導士であれば、そこがどれほどマナの密度の高い場所であるかがわかつただろうが、精霊使いであるラティーマにはわからない。

精霊であるリディに聞けばわかる事なのだが、ラティーマが気付いていない以上、リディにそれを見せてくれるように頼む事はないだろう。

「きつと昔は綺麗だったんでしょね？」

（今は綺麗じゃないの？）

もちろんそんな事はない。

ラティーマの目にも、これはこれで不思議と調和のとれた美しさを感じる。

見渡せば、切り出された当時の緻密さが伺えるような、綺麗に揃った石組がそこかしこに存在し、どうしてそうなったのか、見当もつかないような形に崩壊している巨大な建造物の跡に、そこかしこから伸びる広葉樹の緑や、頬をなでるそよ風と飛び回る小さな羽虫に色鮮やかな小鳥達と、草の陰から聞こえる虫や水辺の生き物たちの声が、なんとも心地よい空間を作り上げているのだ。

「不思議ね？ 落ち葉も苔も無いのはなぜ？」

（知らない。でも、ティーはうれしい？ ここが好き？）

「好きよ？ 綺麗なもの」

と、ラティーマの言葉に何を思ったのか、すいっと、霞のようにまとわりついていたリディの体が拡散する。

（じゃあここをティーにあげる！）

「あ！ まって！ 何もしちゃダメ！」

（どうしたの？）

「だって、私のものにするって、リディは何をするつもりだったの？」

拡散しかけたリディが再び集まってくるのを感じてため息をつく
ラティーマ。

（妖精にここから出ていくように言う）

「だめよそんなこと！ ここは妖精の神殿なんですよ？」

（違うよ？ シリレスって呼ばれてる神様の神殿）

言われてみれば、倒れた石柱の一つに女神シリレスの紋章が、浮かし彫りされているのが見える。

「でも妖精が……ねえリディ？」

（なに？）

「妖精がいるのね？」

（いるよ？ やっぱり追い出しちゃう？）

「だからダメだってば！」

と、意識を精霊の目に集中し、改めて辺りを観察するとそこかしこに、魔物とも精霊ともつかない、不思議な光が見え隠れしている。おそらくその光が妖精なのだろう。

そちらに視線を向けると即座に消えてしまうから、ラティーマは妖精達に見張られているのに違いない。

「私、もしかして、なにかしたかな？」

（なにかって？）

「なんでもない。それよりリディ、妖精と話したいんだけど、どうすればいいの？」

（話しても意味ないよ！ 妖精なんて全然つまんないんだから！）

「つまらなくてもいいの！ どうすればいいのか教えてよ！」

なにが気に入らないのか、リディはしばらくざわざわと渦をまいているだけだったが、その間にラティーマには聞こえない声で妖精達と話をしていたらしい。

（一番奥の泉にいるから、そこに行けば話せるよ）

「ありがとうリディ」

妖精の棲む泉があるというのは本当の話だったらしい。

だが、どうしてこんな貴重な神殿が忘れ去られてしまったのか理解できない。

「でも、こんなにマナも濃いいし、妖精まで棲んでいるのに、どうしてこの神殿はわすれられてしまったのかしら？」

（しらない）

答えを求めて口にした言葉ではなかったが、リディはすっかりそれにも答える。

「そうよね。でも不思議だわ」

と、とりとめもない思考をそのまま口にしながら、崩れ落ちた神殿の奥へと進むラティーマの目に、さらに驚かされるものが飛び込んできた。

「なんて大きな木……ねえリディ、あれ、もしかして生命の大樹じゃないの？」

（そう）

あつさりと肯定された事で、思わず歩みをとめてしまっラティーマであつたが、驚いてばかりもいられない。

「どうしてこんな場所に……」

（どこかから持ってきたんだよ。妖精はアレが好きだか）

どこかから、って、と絶句し、言葉につまった事で自身の歩みが止まっている事に気付いて、再び歩きだすラティーマ。

どうりでマナが濃いわけである。

崩れ落ちた神殿の遺跡の奥、神秘的な静寂に包まれた木々の向こうに、周囲の木々を圧倒するかのように、広く、大きく枝を伸ばしている生命の樹。

目に見えるほどに濃いマナに調和した、美しく心地よい空間である。

傾きかけた日差しの中で、木々を揺らす心地よい風に羽虫が舞っている。

時折、小鳥や他の森の生き物たちの鳴き声が聞こえる。

それだけで何だか嬉しくなってしまうラティーマだったが、人の目を遮るようにして均等に立ち並ぶ木立と、その合間に見える大きな泉を見つけて、再び足が止まった。

「リディ、妖精がいるのはこの先？」

（この先にもいるよ）

つまり他にもいるというわけだ。

「妖精の女王は？ この先にいるの？」

（わからない）

そうすると隠れているのだろうか？ と、リディの言葉に一瞬首を傾げたラティーマだったが、不意に、耳には聞こえない声で、彼女を呼ぶ声が響いてきた。

（そこで生まれ。古の血の女、精霊使いよ。汝が目的を聞こう）

（生意気な妖精！）

と、どうやらリディにも聞こえていたらしい。霧状だった体が個

体化するのを声を上げてやめさせ、その声に答えるラティーマ。

「妖精の女王よ。私は質問があつて参りました。使徒のラティーマと申します」

（妖精の女王、そう呼ばれるのは久しぶりだ。使徒のラティーマよ。質問とは何だ？）

「神々の沈黙の理由にございます」

と、ラティーマの質問が終わると同時に、均等に並んでいた木立の一部が傾いで、人ひとりが楽に通れるほどの隙間が開いた。

「……入っていいのよね？」

妖精からの答えは無く、代わりにリディが、不機嫌そうに渦を巻いてそれに答えた。

森の妖精 01 ラティーマ（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。
よろしく願います。

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www.36.at.wiki.jp/2the-paradise/>

森の妖精 02 ラティーマ

ラティーマが案内されたのは、周囲に深く豊かな水を湛えた泉の中心ある島だった。

リディが足場を作ってラティーマを渡したのである。

その小島には、直径五〇キッサス（約三メートル）はあるに違いない、生命の木と呼ばれる鉾樹の巨木が天高く聳えている。

「リディは良いって言うまで何もしないで。声も出しちゃだめよ？」

怒ったように渦をまくリディに命令すると、ラティーマはどこにいるのかわからない精霊の女王にかわり、生命の木に向けて両手を上げ、神殿で祈る時のような声で呼びかけた。

「妖精の女王よ。聞こえていますか？」

（聞こえている。まずはここで身体を休めるがよい。汝は疲れている）

「ありがとうございます。ですがどうかお教えてください。神々の沈黙のわけを」

（ラティーマよ。我らにもわかる事とわからぬ事がある。だが神々が沈黙している理由であれば答えられよう。神々は、互いの会話のみに集中している）

それは確かに一つの答えではあったが、それでは一体どんな会話に集中しているのかが問題になる。

「互いの会話とは一体どのような内容になりましたようや？」

（大いなる力の源、密に捻れた伝える力の塊と、空を越える彼方の時の記憶である）

妖精だの精霊だのが語る言葉は謎が多すぎて、理解できる事の方が少ないくらいなのであるが、今回の答えもまた理解に苦しむ言葉の羅列であった。

（ところでラティーマよ。汝の問いに答えし我らの請いを、どうか聞き届けてくれまいか？）

「請い、でございますか？」

問い返したところで、ラティーマの背に冷や汗が流れる。

（イロネという我が眷属の一つが、北の大地に向かったまま行方を断った。きっと難渋しておろう。それを助けてやつてもらえまいか？）

「イロネ？ 眷属の一つ？ 北でございますか？」

厄介事、それもかなりの大物といっていい厄介事であろう。

（北の大地。近くはないが遠くもあるまい）

「私には名前も姿も知らぬ者を、どう探せばよいのかわかりません」
質問の答えに対する代償を先に決めるべきだった！ などと今更後悔してもはじまらないだろう。

（我が眷属を一つ連れて行けばよい。イルメリという。仲良くしてやってくれ）

女王の言葉と同時に、ラティーマの目の前にふわりと降りてくる一体の妖精。

薄い半透明の細長い羽根に、小さく愛くるしい子供のような身体つきの妖精だった。

「……わかりました。その、私は、北の大地にいるイロネを連れて帰ればよろしいのですか？」

（イロネが難渋しておるのでなければそれでよい。イロネに聞いてイルメリを我らへの使いといたせ）

「はい」

どうやらまたも面倒な事になったラティーマであった。

森の妖精 02 ラティーマ（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。
よろしく願います。

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2theparadise/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9192t/>

精霊の掟 —ヴァイレサック年代記—

2011年7月26日03時17分発行